

## 第Ⅱ章 石のカラト古墳

### 1 研究史

石のカラト古墳は奈良県奈良市と京都府相楽郡木津町にまたがっている。そのため、奈良県側では「石のカラト古墳」と呼ばれ、京都府側では「風灰（カザハヒ）古墳」という異称があるが、今日「石のカラト古墳」にほぼ統一されている。

そこは享保9年（1724）の「五ヶ村惣図」によると大和側が勝利したことにより、所領するにいたった北に張り出した大和領域と京都側との境界となっている。この山論は豊臣秀長が大和治領の時に超昇寺郷と山城国相楽郡との間で起きたものであり、超昇寺郷が勝利したので「神裁場字別当ヶ平」の名称がある。

「石のカラト」の由来については諸説あり、「日本書紀」に忍熊王子が戦いの際、石を集めて造った石畳の跡だとか、石櫛に投げ込んだ石がカラカラと音を立てるからだとか言われるが、カラト＝唐戸、すなわち框を組んで間に板を入れた扉のことであるから、早くから石櫛が盗掘にあって露出していたことに起因するものであろう。

この古墳が広く知られるようになったのは1920年に長江正一「京都府相楽郡相楽村の方形墳」によって、墳形と石櫛の図面が検討されたことに始まる（長江1920）。この段階ですでに上円下方墳の予測がなされ、石櫛の詳しい記録がなされそれが珍しいことが指摘されている。その後、梅原末治が「相楽村ノ方形墳」として報告している（梅原1925）。そこでは、1段構成の方墳とみて、埴輪はないが葺石の存在することを指摘している。そして、石櫛を家形の組み合せ式石棺の一種とみて、その「喰ひ合はせ」に注意を喚起している。なお、石櫛内の礫石についてはもともと引かれてあったものである可能性も指摘している。埋葬施設の形態から、後期の方墳とにらんだが、石室がなく直接石棺を埋めていることを珍しいとする報告がなされた。ところで、長江・梅原らが京都の遺跡として報告したのに対して、坪井清足は遺跡地の大半が奈良市に属することを指摘した（坪井1948）。この指摘があつて開発に先立ち調査をおこなうことになったことは明記しておかなければならない。

京 都 府 の  
報 告

この後しばらく詳しい報告は見なくなったが、1968年刊行の奈良市史（奈良市1968）では一部石櫛の再実測に基づく考証や「五ヶ村惣図」の紹介がなされている。時期については、古墳時代末期で、奈良時代に近いころと考えられるとし、今の基本的な年代観が提示された。この時は、墳丘について円墳としている。

発 掘 調 査  
と 概 報

その後、本調査がなされ、ただちに概報が作成された（京都府1979）。そのすぐ後で、遺物の遺漏分をも補って『飛鳥時代の古墳』（飛鳥資料館1979）が展示にともなって刊行され、本古墳の重要性はあまねく知られるようになった。それから、この2冊に基づいた数々の論が展開されて今日に至っているのである。

## 横口式石槨

石のカラト古墳が古墳時代の終末期を考える上で欠くことのできない古墳として、重要性和ともに詳細なデータの提示の声が年々増加していったのには次のような理由がある。ひとつには上円下方墳という特異な墳形を採用していることがあげられる。だが、それにも増して、研究者によっては石棺式石室とも呼ばれる横口式石槨が、飛鳥地域の壁画古墳と類似しており、飛鳥時代から奈良時代にかけての代表的墳墓としての要件を具体的にそなえていることが認識されるに至ったからである。飛鳥地域の壁画古墳は多くの研究者が世論を巻き込んで被葬者論や系譜論が盛んになされ、その都度、石のカラト古墳が引き合いに出されてきた。

そのなかでも、被葬者を絞り込むためには避けて通れない年代をめぐるもっともさかんに議論が続いている。今日まで墓道や墳丘周囲から出土した須恵器を高く評価して年代を奈良時代に下げて考えようとする意見と（近つ飛鳥2003）、飛鳥地域にみられる類似石室との比較や火葬の開始年代などを考慮して、7世紀末～8世紀初頭とする意見とに大きく分かれていると言えよう。支持者の多い後者は、土器の年代を直ちに古墳の築造時期に結び付けないとする『飛鳥時代の古墳』の見解を襲っているとみることができる。これらの年代をめぐる議論はいっばうで宮都と葬地をめぐる議論とも結びついて展開してきた（金子2004）。

## 壁画古墳の調査

こうした歩みがあったところに、近年になって、高松塚古墳とキトラ古墳の両壁画古墳がその保存問題を契機に本格的に調査されるにいたり、石のカラト古墳の全容をいち早く公表することの意義はいよいよ高まった。なぜなら、墳丘についての調査は両古墳ではこれまで不十分であり、石のカラト古墳では墳丘についての多くの情報が得られていたからである。例えば、古墳の盛土に土嚢を用いた痕跡を確認していたことなどは、早くから研究者に評価されており（江浦1998）、墳丘構築過程を考証できる格好の資料を提供してきた（右島他2003）。そして、壁画はもたないが他の要素においても壁画古墳に対比され、いっばうで敷石をもつ点で唯一石のカラト古墳と共通性をもつマルコ山古墳の墳丘調査も2004年度から開始された。

## 上円下方墳

また、飛鳥地域の終末期古墳だけではない。石のカラト古墳が最初の例となっていた上円下方墳は、1985年に確認されその後調査された静岡県沼津市清水柳北1号墳（沼津市教委1990）で見つかったからしばらく類例がなかったが、2003年から2004年にかけて国内3例目となる上円下方墳の東京都府中市熊野神社古墳が調査される運びとなった（塚原2004）。大型の石室をもつ上円下方墳の発見は、石のカラト古墳に先行する可能性が高く、その先後関係についての議論は東国の古墳の系譜を考える上でも重要視され、その意味でも本報告書の作成が急がれるようになったのである。

さらには、ここ2、3年のうちに大阪府の平石谷古墳群におけるシシヨツカ古墳、アカハゲ古墳、ツカマリ古墳などの終末期大型方墳や奈良県御所市ドント垣内古墳など、関連する終末期古墳が相次いで調査され、終末期古墳時代研究はにわかに活況を呈するようになってきた。平城宮跡発掘調査部考古第2調査室では、ちょうど音乗谷古墳出土遺物の資料整理を進めていたが、こうした機運を受け、合わせて石のカラト古墳についても詳細を報告することにした。したがって、本書は今日展開されている数々の議論を展開することよりも、客観的な事実をいち早く共有させることを第一義とした。発掘後25年のときを経て、失われた情報もけっして少なくないが、可能な限り多くのデータを提示することは、終末期古墳の調査方法や成果をよりよいものにするのに役立つと確信する。この点を踏まえ研究の未消化な点をご寛恕願いたい。

## 2 発掘調査の経過 (Fig. 2・3)

### A 発掘区の設定と調査の経過

はじめに、伐木をおこなってから平板測量によって現況の地形を把握した。伐木をおこなったのは調査の対象となる西側で、等高線の間隔は墳丘部分で0.2m、周囲は0.4mとした (Fig. 4)。その後の発掘調査中に使用した座標は、住宅公団が墳丘の北面に配ったB.M. (ベンチマーク) 6を(0, 0)を原点とし、そこから南北にX座標、東西にY座標を設定して各地点をとらえた。しかし、ここではその際用いられた各地点のXY座標ではなく、奈良山全体の測量に対してかけられた国土座標を基準とする座標 (日本測地系第6座標系の $X = -144,000$ 、 $Y = 21,000$ を原点としてXY座標の目盛りを切ったもの) を第6座標系に換算した数値を使用する。

測量調査

発掘調査は現状での墳丘の中心を通して東西南北に延びる十字形のトレンチを幅1mで設定することから開始した。東から時計回りに第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチ、第4トレンチと呼ぶ。

十字トレンチ

このうち第2トレンチから第3トレンチを通して第4トレンチに至る墳丘上部分は面的に広げて調査をおこなった。また、第2トレンチは墳丘前面の排水溝検出にともない適宜拡張した。第5トレンチは、最初周溝と考えていた外周平坦面のさらに外側の状況を確認するために、第3トレンチとはほぼ平行に設けたものであり、また、第9トレンチは古墳から南に離れたところにある土手状の高まりの性格を確かめるために設けたものであるが、それ以外のトレンチは墳丘周囲の排水溝の確認のためにあけたものである。

発掘の進行はほぼ以下のとおりになされた。

1979年1月17日より第1～4トレンチをあけたが、掘削早々、墳丘周囲の周溝 (以下、外周平坦面と呼ぶ) を予測させる地形や葺石が確認された。当初、東西南北で外周平坦面の幅や石の形態などに差異があるように認識されたのだが、これは、墳丘の段の比定間違いが絡んでいたため、全体的にはシンメトリーであることが後にわかる。

このトレンチ調査の結果、墳丘第1段のテラスが東西と北で幅約1.8mであることが確認され、これを受けて、墳丘部について最初に西南4分の1をめくることにした。それにより、方形の第1段の上に円形の第2段をもつ上円下方墳であることが確定した。そして、2月13日から墳丘の西北部4分の1についても墳丘を露出させることになった。

墳丘西半  
全面調査

墳丘周囲の調査も墳丘本体と並行して進めた。

北と東では外周平坦面にある石は本来のものでなく、墳丘からの転落である可能性が浮上し、本来の姿についてはしばらくの間はつきりさせることができなかった。墳丘南側については周溝状の外周平坦面が回る様子ではなく、かわりに下方部墳丘に潜り込むかたちの幅0.6mの排水溝SD02が検出された。

外周平坦面

また、墳丘西側に第3トレンチを拡張するいっぽう、さらに北側に併行して第5トレンチを設定し、墳丘西側の様子を調べた結果、もともとは現在見られる地形の段差はなく緩やかに上がっていくだけであることが確かめられた。同様に東側や北側でも旧地形を調べ、北側でも地

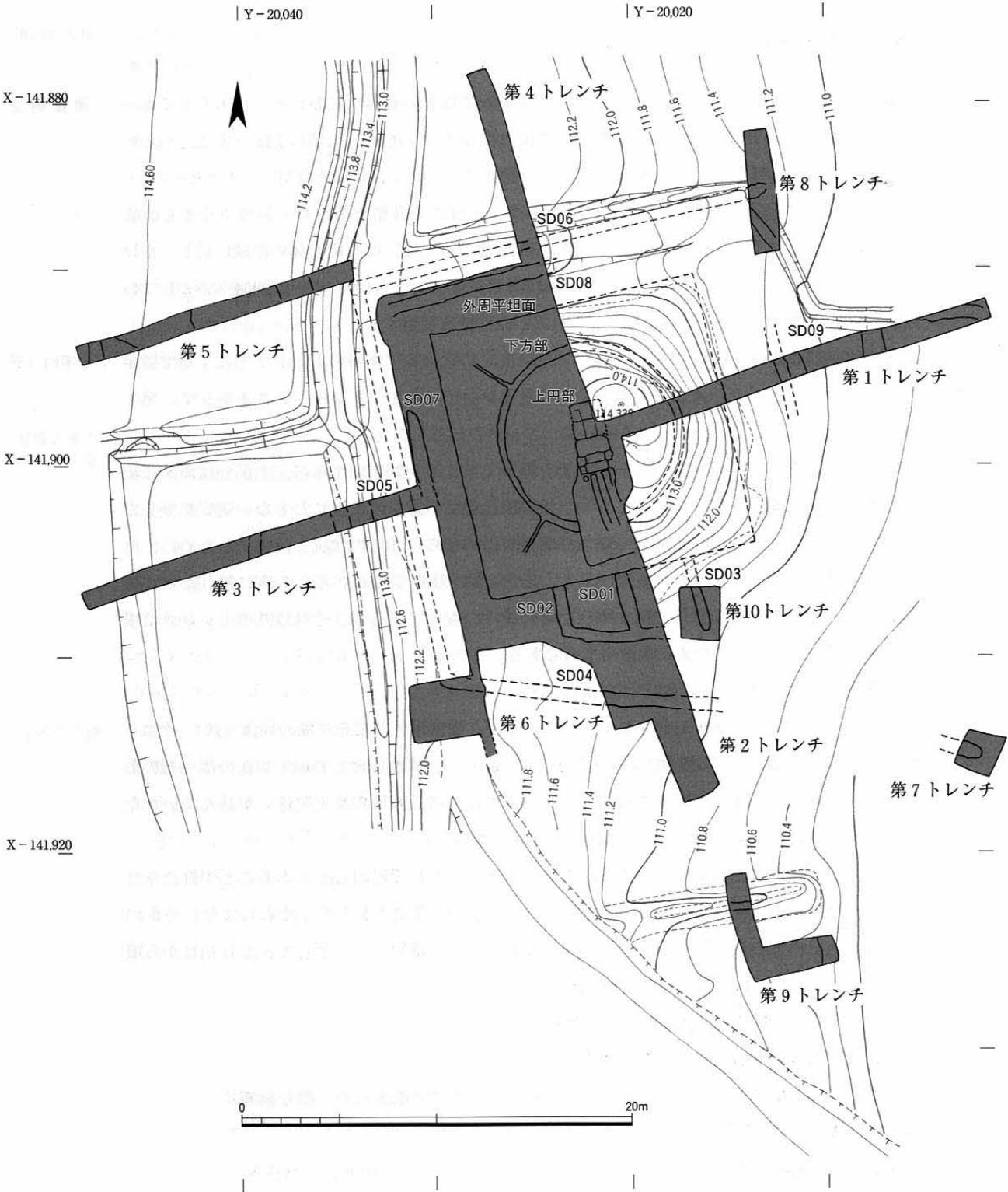


Fig. 2 石のカラト古墳 トレンチ配置図 1:300



形が緩やかに高まっていくことが知られた。

墳丘南側では第2トレンチを拡幅し、第10トレンチ検出分を含めて南北方向排水溝を計3条確認し、西南外周平坦面コーナーでは第6トレンチでもっとも西よりの排水溝SD05が約105度に折れてSD04になることが確認された。そして墳丘南北軸から約14m東南に延長した第7トレンチでSD04の続きを確認するとともに、墳丘南北軸から約12m東側の地点の第8トレンチでSD06延長部分を確認した。

いっぽう、墳丘からさらに南に遠く離れたところにある土塁状の高まりについて第9トレンチをL字形に入れて調べたが、性格は明らかにできなかった。

2月14日からすでに墳丘調査と並行して盗掘坑を掘り南半を露出させていた石槨内部の本格的調査にかかった。奥壁近くの堆積土からはかわらけが出土したが、流入土を除去すると、ほとんど有機物の層や遺物がないうま床面が露出した。終了近くに飾り大刀責金具や漆残片が出土した。また、これらを包含する土を水洗選別したところ、漆片や、金製、銀製の玉、金箔片などがみつかった。

石槨内部の  
調査

2月20日から、墳丘裾回りの外周平坦面部分や墳丘裾について断ち割りをおこなって構造を調べた。その結果、掘形をとまって基底石を縦位に使用して据えていることや、墳丘北側のトレンチ北壁よりのところにも外周平坦面を切るSD08が確認された。いっぽう、西側の暗渠SD07の断面を見ると、肩までは石が詰まっておらず、両脇のバラスが落ち込んだように観察されるのでこれら2条の溝が開渠であった可能性が出てきた。

主体部の調査のうち、墓道部分の調査を3月8日より開始した。墓道埋土を除去していくと、石槨前の墓道底面には2条のコロレールの抜き取り跡がみつき、それらを埋め戻してから南面の墳丘外表を完成させたことが確かめられた。そして墓道埋土観察用ベルトの下からは礫敷の墓前祭遺構がみつかった。また、石槨底面前面にも礫を敷いた様子が確認されたが、これは地山上に石槨範囲にあわせて敷いたものの一部とわかった。

最後に墳丘本体の断ち割りを石槨後方に対して実施し、墳丘の築成状況を確認した。調査後、1979年3月29日に石室開口部には板状のコンクリート2枚をかぶせて閉塞し、すべて埋め戻して終了している。調査面積は313㎡である。

## B 調査日誌

1月9日(火)

伐採開始。

1月11日(木)

トラバース。

1月12日(金)

平板測量開始。

1月17日(水) 晴れ

慰霊祭。墳丘を中心に東西南北に幅1mのトレンチを設定。第1トレンチでは一部、腐植土下に葺石が遺存していた。墳丘周囲には周溝(注 本書でいう外周平坦面)がめぐる。墳丘は黄褐色の山土を積むが、版築の痕があるかはわからない。

1月19日(金) 晴れ

第3トレンチでも墳丘裾に葺石を確認。テラス

があって立ち上がるもよう。外周平坦面は西肩が未確認であるが、幅5m近いと考えられる。道路縁の崖までいくのか。第4トレンチで外周平坦面の北肩を求めるが、最終的に未確認。第2トレンチでは墳丘裾から5m南に性格不明のバラス面がある。ここには外周平坦面がないのか、土色の変化がみられない。

1月20日(土) 晴れ

外周平坦面の様相が各トレンチで異なる。東側は墳丘裾外に幅約1.5mのテラスをもち、その外に幅の狭い溝SD09がめぐる。溝肩はグラグラ上がり、溝内の端には小石が集中する。第3トレンチでは、墳丘は溝底から1m立ち上がって幅1mのテラスを設け、さらに立ち上がる。

1月22日（月）晴れ

北にも東西と同じくテラスがつく。第2トレンチの石櫛周囲はかなり大きく掘られているらしく、南から2個目の天井石が露呈。第1トレンチの溝を掘り上げるが、底に石は全く見られない。墳丘西南1/4に設定したトレンチの調査を開始。

1月23日（火）晴れ

墳丘の東・西・北テラスを掃除。上段の上がりには石がなく、柱穴か大きな石があったものが抜かれた可能性もある。3方のテラスのレベルはおよそ同レベルである。このテラスのレベル・幅が3面とも同一とするなら、東側裾のテラスが解釈できる。すなわち、傾斜地において方形で、テラスを水平に基壇を造るためには、東側にテラスを造り調整する必要があったのであろう。

1月24日（水）晴れ

西南調査区上段の土を2/3程度除去した結果、残っていた葺石面の状況から上段の墳形が円形に近いことがわかった。下段南面は一部しか検出していないが石の面がやや低く、東西に直線になる可能性がある。上円下方墳か。第2・4トレンチの清掃を続行。外周平坦面はもともと石を敷いていなかった可能性が強まった。石櫛上の盗掘坑を一部清掃。盗掘は棺に当たる前に墓道部と考えられる部分を掘り、その後、棺に当たったらしい。南から2枚目の天井石の面まで下げ、それから南端の天井石を破り、はずしている。

1月25日（木）晴れのち曇り

西南調査区でコーナーを検出。下段が方形であることが確定した。石櫛前面の盗掘坑はかなり大規模であり、閉塞石の前面にまで及んでいる。外周平坦面が南側に回るかどうかは未詳である。

1月26日（金）晴れ

石櫛前面の盗掘坑を完掘。西南調査区の下段コーナーは、基底石から2～3段は完存するものの上部は崩落している。少しずつ転石をはずす。南辺では墳丘下にもぐり込むかこうで幅0.6m、長さ3mにわたって小礫を詰めたSD02を検出した。南北方向に延び、南は切れるもよう。排水溝の可能性もあるためトレンチを西側に拡張して追求する予定。

1月27日（土）晴れ

墳丘裾部の葺石清掃。

1月29日（月）小雨

墳丘上の作業は雨天のため中止。西南のトレンチを拡張。明日の見学会の準備。

1月30日（火）曇り一時雨

昨夜の雨のため外周平坦面の発掘は中止。西側斜面に第5トレンチを設定し、調査を開始する。この結果、当初考えていたよりも西側斜面の傾斜が緩やかであることが判明。

1月31日（水）曇り

西側斜面の第2・第3トレンチを完掘する。SD04西南コーナーを出すため3m×3mのグリッドを第6トレンチとして設定。西側外周平坦面の西壁際に排水溝を掘った際、礫を詰めた排水溝SD07を確認。

2月1日（木）曇りのち晴れ

第1・3・4トレンチを各2～3mずつ延長。

2月2日（金）晴れ

土曜日の写真のために掃除。下段テラスの葺石は、コーナー部分が溝状にあげられている。

2月3日（土）晴れ

写真のため掃除をおこない、2カット撮影。

2月5日（月）晴れ

墳丘南側に外部施設を求め、第2トレンチを3m×2mに拡張。外周平坦面の状況は今までと同じ。SD01は自然になくなるのかと思われたが、墳丘南西コーナーから3.5m東で検出した排水溝SD02は墳裾から約3mで東に折れ、SD01に合流することをボーリングにて確認した。第6トレンチでは、SD04の西の立ち上がりはわかるが、南側の上がりが不明。排水溝を観察しても、溝の立ち上がりはよくわからない。溝がさらに南に続くか。溝が浅く、周囲の堆積と同じゆえわからないのか。公団側の松の木を伐採。

2月6日（火）曇りのち晴れ

排水溝をさらに下げる。外周平坦面西南コーナーについての解釈は一応は暗茶褐色土を南の壁とするが、疑問が多い。溝縁の石列は比較的厚い。墳丘南面で検出した暗渠SD01とSD02は後者が前者を横切るように合流する様子を確認。墳丘の南西は掌大のバラスが一面にある。

2月7日（水）晴れ

暗渠・葺石の目地を掃除。外周平坦面周辺にある暗渠は、一本は南東に、もう一本は南西にまわると考えられ、南東方向SD04はボーリング探査によって14m余り続くことが判明。この付近に2m×2mで第7トレンチを設定。西南のものは、ボーリングでは明らかにしがたい。

2月8日（木）晴れ

写真測量のセットとそれに備えた掃除をおこなう。第7トレンチにて墳丘の外側をめぐる石詰暗渠、SD04東端を確認。SD06はボーリングの結果、第8トレンチの東側でも石に当たる箇所があるが幅が狭く断続的である。明確ではないがこれでは東端を検出したと思われる。この第8トレンチにて暗渠を検出した層がバラス混じりの黄褐色であったが、これが地山とすると、墳丘東西の溝は地山を凹めただけで墳丘築成時以前のものとするべきか。

2月9日（金）快晴

写真測量、半分終わる。平面は半分のみ、立面は全カット終了。残りは明日。土塁状の高まりの

性格を明らかにするため、周囲の廃土を除去し、東西は1.5m、南北は1mの幅で第9トレンチを設定する。

2月10日（土）曇りのち晴れ

降雨で写真測量中止。来週水曜日頃に実施予定。墳丘南側にある土塁状の高まりは、ほぼ積み土の状況がわかるが、遺物その他はなく、時期も決定できない。拡張予定の西北1/4の測量を2月19～22日の間に実施できるように作業を進めることとする。『五箇村惣図』の件で県立図書館の広吉氏に電話。歌姫地区の区長が保管のはず、とのこと。山陵地区の図は虫食いがあるとか。

2月13日（火）晴れのち曇り

写真測量を昼過ぎに終了。墳丘の西北1/4を剥がし始める。作業を容易にするため、第3トレンチ北壁のセクションをとる。西側の石を詰めた暗渠SD05は一部開渠であった。灰色粘土が石を覆っている。

2月14日（水）曇り

石櫛内の掃除が進む。表面の腐植土を除去。下に版築土の崩壊した明褐土がある。河原石・礫が多量に落ち込んでいる。墳丘西南部第1段目では、葺石の2/3程度が現れるが、裾部未検出。

2月15日（木）晴れ

墳丘西北1/4の遺構検出が済む。松根に手間取る。石櫛の掃除。奥壁近くの茶褐土・灰褐土から中近世の土器片が出土。盗掘時期を決める。石櫛の中央部は盗掘後のかなりの期間、オープンの状態であったらしい。床に有機物などの層はない。

2月16日（金）晴れ

石櫛内の掃除。墳丘西北部と周辺の遺構検出。石櫛内は床面まで約5cmに達し、一部底面を出したが、依然、有機物の層はみられず。棺材その他は絶望的。墳丘の裾まわりは、写真測量のことを考え若干拡張、ほぼ石の面に達する。墳丘の葺石はコーナー部分を残してだいたい露出させた。

2月17日（土）曇りのち小雨

石櫛内の掃除。拡張部分の遺構検出と排水溝掘り。石櫛内は底面を約3/4露出させる。有機物の層もなく、目覚ましい遺物もなかったが、終了間際、銀装大刀の責金具が1点出土。中の土には漆膜の破片も付着している。底面に竹が数本貼り付いている。石櫛底面は天井石と略同じ枚数・寸法で、合わせ目も天井石とそろえているようである。

2月19日（月）晴れ時々曇り

石櫛内の掃除終了。漆の破片が出土。棺の破片か。水箕の結果、布目の精粗2種がある。金箔も検出。墳丘裾部の遺構検出。西側は、玉石の下にバラスが一面あり、これに連なる形で南北方向の暗渠があるが、西北部分ではバラスがあるのかどうか不明。やはり、暗渠と一体になる形で石・バラスが幾層かに敷いてあると思われる。墳丘の角

石を基準にエスロンテープで一辺長を求めたところ約13.62mであった。

2月20日（火）

墳丘裾周りの遺構検出。築造時はバラスのみか。但し、完成時にはその上に玉石を乗せたとも考えられる。暗渠との関連からすれば、バラス・玉石がセットになるか。墳丘第1段目と第2段目の境に玉石が並ぶが、性格等は不明。

2月21日（水）

写真測量とそのための掃除。立面写真を実施。2:30頃、朝日新聞社のヘリ飛来。

2月22日（木）

写真のための掃除。樹木伐採と、昨日倒した松の処理。

2月23日（金）

強雨のため中止。午前、県立図書館へ行き『五箇村惣図』の件を広吉氏に尋ねる。

2月24日（土）

雨のため中止。石櫛流入土中に何かないか、見廻りを兼ねて来る。直径8mm程度の金の玉1個を発見。土を袋に入れまた持ち帰る。

2月26日（月）曇り時々晴れ

午前、掃除とヤグラ組み。午後、写真。

2月27日（火）曇りのち晴れ

写真。外回り・細部など31カット。

2月28日（水）

測量点打ち。各トレンチのレベルはB.M.6を(0.0)としている。要換算。

3月1日（木）曇り時々雪

午前中、測量。午後、山陵町南本宅にて五箇村惣図を実見。

3月2日（金）

実測。3時から皇龍寺のスライド会。

3月3日（土）

実測。壁面を削り、一部セクション作成。

3月5日（月）

セクションと墳丘の裾を若干切る。基底石は長さ25cm程のものを縦に立てて用いる。小ぶりのものもやはり立てている。掘形はバラス面から20～30cm。墳丘南側の葺石をはずす方針となったので、ステレオフィルムに移っていない範囲を実測する必要がある。

3月6日（火）

墳丘南の葺石実測終了。各セクション大略終了。第1トレンチの墳丘裾、断ち割り裾を掘ると、基底石が手前に大きく倒れていることがわかった。今までは倒れた小口を見ていたことになる。

3月7日（水）晴れ

墓道検出開始。平面で削ったがよく分からないため、西の壁に向かってトレンチを入れる。発掘区北壁下に見える礫は、東西暗渠SD08となった。西側暗渠SD07のセクションをとる。開渠

であった可能性も否定できない。

3月8日(木)曇り時々小雨のち晴れ

墓道を本格的に掘り始める。東西のセクションをとれるよう土手を残す。墓道の西側は側壁の小口部分で曲がっているようである。光線の具合もあり、墳丘との境は見難い。墳丘北側の暗渠SD08は略規模がわかる。墳丘西側の暗渠SD07とは接続しないようである。きちんとしたところは幅0.6m程だが、途中から0.2mくらいだらしなくなる。この状態からすると、SD07は外周に接続せず途中で消えるか。石槨の掃除。

3月9日(金)晴れ

墓道の調査、石槨の水洗い。現地説明会用に切り株の処理。墓道のほぼ底に至った。墓道埋土は上面1/3は小バラスをまじえた明褐色の粘土・砂を搗き固めるが、以下は灰色・褐色の粘土に砂をまじえる。この粘土層は閉塞石の下端から2~3mのところで突然、明褐色砂・灰黒砂の層に至る。ここには礫が多く、側壁部分は緩やかに上がり、やはり礫が顔をみせている。扉石は床面に完全に乗り、薄い小石3枚を下端に挟んでいる。墳丘南、石槨下にもぐる暗渠を中心に、東西に暗渠があるか確認のため第10トレンチを設定する。中央の暗渠SD01から東3.5mに暗渠SD03を確認。SD07とSD08を掃除。

3月10日(土)雨

墓道の調査、石槨の掃除。裾まわりの礫の掃除。現地説明会用株切り。墓道の下底面、石槨前面には幅10~15cm程度の溝が2条南北に走る。墓道底面に礫敷が現れたが、性格は不明。基底付近をのぞき第1段目の葺石をはずし、掘り始める。この付近では墓道は石槨前よりも広がっている可能性がある。土層の切れ目が見つからない。

3月12日(月)曇りのち晴れ

墓道の調査、石槨の掃除、外回りの整備。墓道の東西セクションを2本とり、その後これをはずす。墓道の南北セクション調査。

3月13日(火)曇り時々晴れ

墓道の調査。午後、石槨の写真。墓道の発掘はセクション壁を取り払って後、墓道の底面を出した。結果、礫敷を広く検出。位置からして墓前祭に関連した施設か。石槨前面に走る溝は、コロレール痕跡であった。

3月14日(水)曇り時々晴れ

石槨・墓道を含む写真測量。明日の写真のために掃除。

3月15日(木)晴れ時々曇り小雨

写真及び現地説明会の準備。写真は石槨前面を残す。第8トレンチでSD08実測開始。

3月16日(金)晴れ

石槨、墓道南北セクション、暗渠実測。石槨実測はレベル・トランシットを用い、基線をはる。

墓道南北セクションについての所見①墳丘の裾付近は墳丘の積土とは違う砂を入れこにしている。②その後、葺石のセットのためか、大きく挟って明褐砂質土を別に付け足す。寺の基壇などで階段をつけるときに見るのと同じか。①②は墳丘側の断面にも認められる。墓道の両側に見られるこのセクションは墓道の埋設後、葺石据え付けようにおこなった地業と考えるが、その場合、墳丘の葺石は墓道の埋設後に同一手順でおこなったか、墳丘南面以外は先に葺石を葺き南面のみ墓道の埋設後に葺いた。このどちらかであろう。

3月17日(土)曇りのち雨

石槨、暗渠SD08の実測。午後2時より現地説明会。準備した資料200余部全てはける。

3月18日(日)曇り時々晴れ

本日空撮、無事終了。

3月19日(月)

墓道西側、石槨のセクション。暗渠SD08の実測。

3月20日(火)小雨のち曇り

墓道の壁にみえる墳丘のセクション。暗渠のレベル落とし。

石槨実測。平板測量。午後2時から写真。

3月22日(木)晴れ

墳丘周囲の埋め戻し開始。墳丘断ち割りトレンチ設定。暗渠SD01・02・03の断面図作成。墓道、扉石前面の1mを少しずつ削り下げる。板抜き溝らしきものを検出。この位置は、墓道を掘り下げたときに見えた溝の位置と同じである。

3月23日(金)曇りのち晴れ

墓道のコロレール抜き溝検出。墳丘断ち割り。石槨天井石の掃除・実測。コロレールの抜き溝は2条を検出。溝は石槨中軸より西に振れる。西溝は扉石前付近で“穴”に切られているのか、ハッキリしない。南端は墓道南端の礫敷の下にもぐりその付近で消えるのか、礫敷の南端に浅い落ち込みがみえる。東溝はトレンチの壁下にもぐり込み、溝底もハッキリしない。墳丘北側のセクションは南側とやや異なるか。

3月24日(土)曇りのち雨

班全員に断面の説明。記念写真。墓道のコロレール抜き溝は2条、柱穴は1基であることを複数の目で確認。コロレール抜き溝を一部掘り下げ、暗渠SD01を出す。墳丘北側の断面図、一部作成。

3月26日(月)晴れ

墳丘上方部北側のセクション終了。ほぼ埋め戻す。墓道・コロレール抜き溝・墳丘の断ち割り、石槨天井部の写真終了。石槨前面のみ扉石の幅に合わせて石を撒いているのか。石槨底面の目地に尺をさし込み、23.5cmあたりがあることを確認。床石も天井同様、相欠きとしていたか。

3月27日（火）晴れ

墓道補足調査終了。石槨床石底面まで整地土と考えられる。石槨写真はキャビネ・16mmともに終了。埋め戻しは下方部葺石に及ぶ。

3月28日（水）

石槨の補正実測。石槨前面の暗渠SD01は、石槨床石南端から約1mで止まり、床石周囲はバ

ラス敷きとする。埋め戻しは墓道に及ぶ。第9トレンチの土塁を断ち割るが、顕著な所見なし。

3月29日（木）晴れ

埋め戻し。石槨にコンクリートの蓋2枚をする。隙間にバラスを詰め、全体に厚く粘土を塗りこめる。

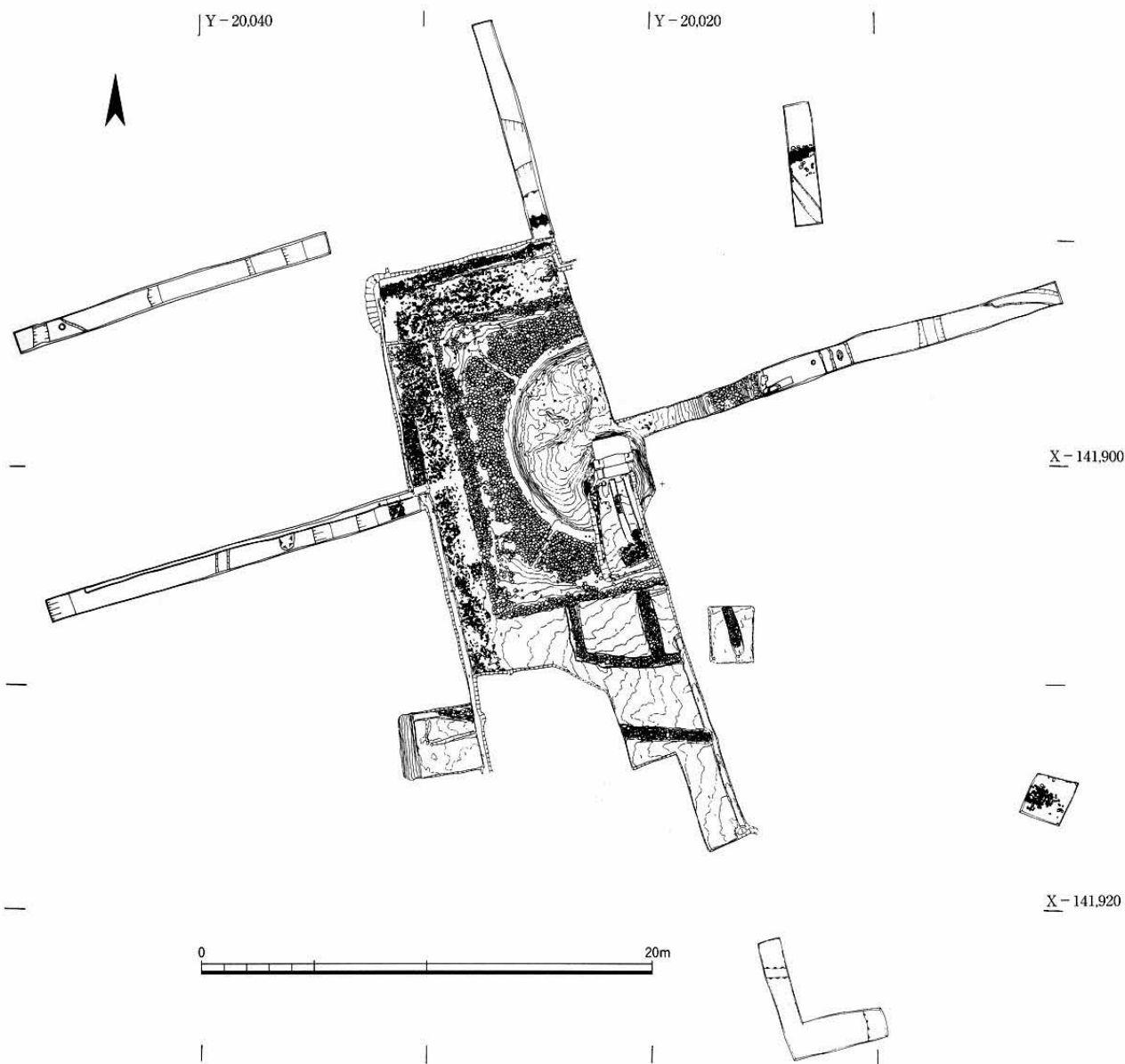


Fig.3 石のカラト古墳 検出遺構全図 1:300

### 3 遺跡の立地

#### A 地理的環境 (Fig.1・4)

今は一部の緑地を残してかつての景観をほとんど残していない奈良山（平城）ニュータウンの中で、もっとも標高の高いエリアは、丘陵の中でも北西の端に寄ったところにある。最高点の

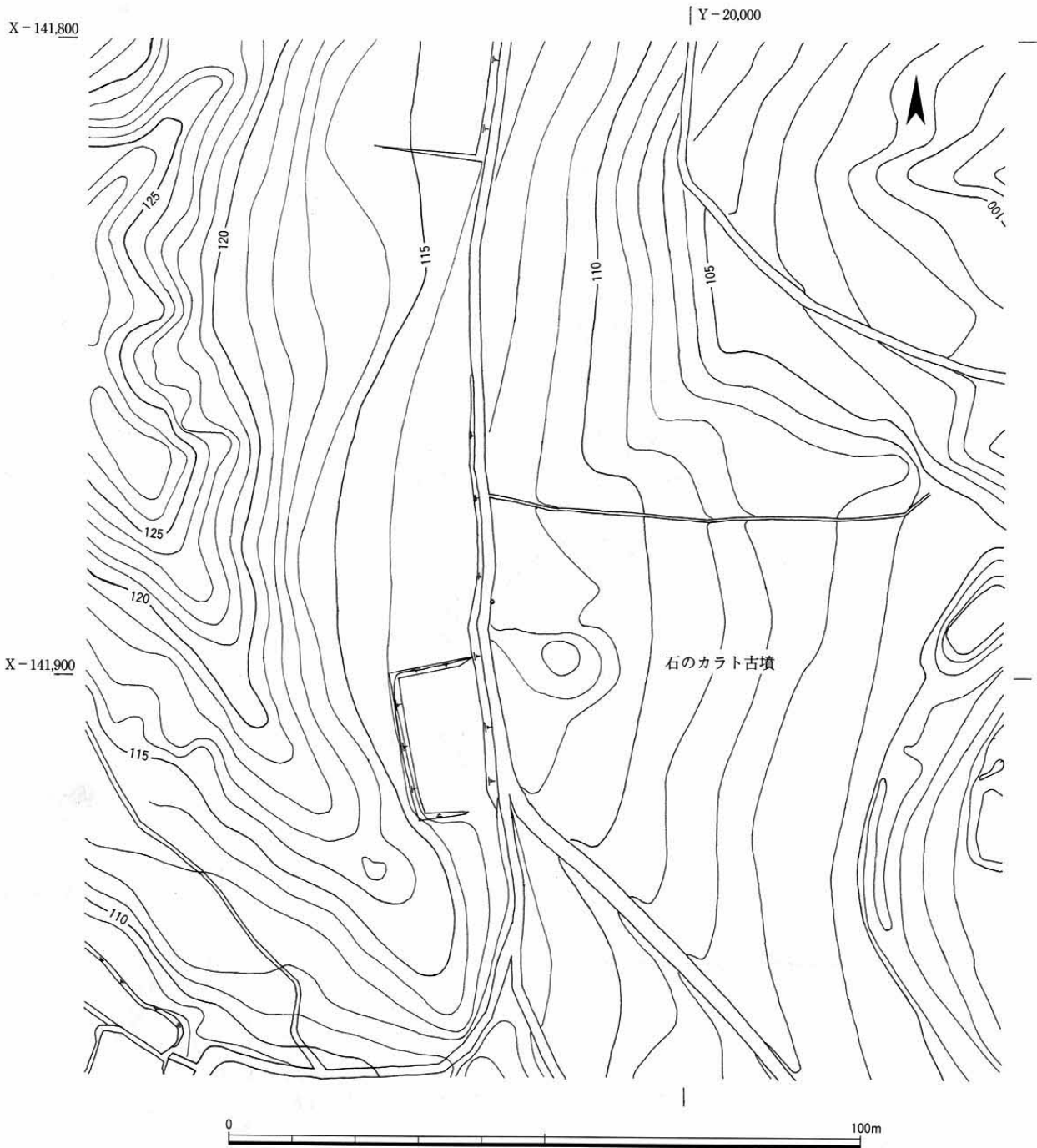


Fig.4 石のカラト古墳 周辺の地形測量図 1:100



標高は136.6mを計る。石のカラト古墳はそこから0.5km南に位置するが、当丘陵内ではまだかなり高所に位置していると言える。

奈良山丘陵  
での位置

古墳を取り巻く丘陵は、北側では最高点を越えると山田川の東流する谷へと急激に下り、西側もすぐに押熊の平地へ向けて降下している。ただし、微視的にみた場合、古墳から西側へ約30m離れたところに、北から南に向けて細長く延びる比高10m前後の支丘があるため、古墳から西側への眺望は北側同様よく効かない。これに対して、墳丘の東側はしばらく緩やかに下降し続けたのち、段丘状に5mほど下がる地形となっており、南側もまた緩やかに下降し続ける地形になっているので、奈良山丘陵の裾を遠く木津川河床まで見渡せる。つまり、丘陵の高い位置で平坦な地形が比較的広く確保されたところに西側に山寄せで造られた古墳と言える。この位置から北にずれると傾斜がきつくなるし、南にずれると西側の尾根に東へ押され、同じように十分な平坦地は稼げず、斜面に造らざるをえなくなる。

西側へ  
山寄せ

## B 発掘調査前の状況 (Fig.5、PL.2-2)

墳丘の調査前の形状は、2段築成であることが容易に読み取れる比較的良好な残存状況で、周囲に周溝状施設ないし平坦面がめぐることとも推察できた。最高所が標高114.339mの墳丘は墓道部分から石櫛前面にかけての範囲が盗掘により大きく削られており、石櫛の天井石が1石はずされ、長く開口したまま調査時まで至っている。方墳の上段の隅角が流れたと見られなくもないが、測量してみると上円部と下方部の形態はそれぞれよく等高線に現れている。

測量図の  
読み取り

ただ、南側に墳丘が一部張り出たように見えているのが、図だけを見ると造り出しにも見えなくもない。しかし、これは上段の抉れに対応し、盗掘の際に掻き出した土砂の堆積を示すものと考えてよいだろう。調査によっても特別な遺構は確認されなかった。

墳丘の周囲は西側と北側に明瞭な地形の整形跡が見て取れる。西側がもっとも顕著であり、墳丘裾から約4.0mの一定の幅で南北に長い平坦地が確保され、そこから1m近く段をもって土手状に地形が上がり、畦畔の西側に幅10mほどの水田面が続く。この状況から西側は旧地形を直線的に削り出していることが推測されるのである。しかし、この段はやや蛇行しながらそのまま古墳の北側まで一連で続いていくので、古墳の築造に際して削り出した段差に重なるように、比較的近年に可耕地にするための改変が加えられたものと考えられる。

西側の整形

西側ほどではないが北側も同様に一定幅で平坦面が確保された形跡が認められるが、裾から2mのところでは小さな段が認められ、さらに2mほど離れたところで再び上昇する。しかし、この外側の段のところには東から溝が入ってきており、等高線が大きく乱れている。西側の観察結果から見ても、ちょうどこの部分までが平坦面が確保されており、古墳の周りを削り出して段になったところに後世の溝が重複して付けられたと思われる状況である。ただし、北側の平坦部は土地の形状を反映してか、墳丘裾の平坦面、段の上ともに東に緩やかに下降している。

東側の整形

以上から、北側平坦部も西側同様旧地形を直線的に削り出して成形されたことが推測できたが、その東端はどの付近までなされたかについては地表からはわからない。

地形の高い西側や北側に対して、東側や南側では明瞭な削り出しのあとは地表からは観察できない。ただし、南側はもともと北東―南西方向に傾いて走る等高線がX=-141.910～-141.915付近にかけて不自然に南北方向に走る部分があるので、ある程度の平坦地の造成がこの付近に

まで及んでいたことが考えられた。また、東側でも墳丘裾を反映する110.4mの等高線よりさらに低い110.2mと110.0mの等高線が、本来ならば斜めに横切るはずなのに、墳丘裾と平行に走っていることが読み取れる。これも盛土による整地などの造成の痕跡である可能性が考えられた。



Fig. 5 石のカラト古墳 墳丘測量図 1:300

## 4 発掘調査の成果

### A 遺 構

#### (1) 墳丘周囲

墳丘周囲の形状に関する調査は、現地形の観察に加え基本的に墳丘を横断する4本のトレンチと第5トレンチによっておこなった。ただし、調査の進展にともない排水溝の延長部分の確認のために何ヶ所か壺掘をしたところがある。以下、調査区ごとに述べていくが、墳丘本体にかかる部分は後述する。

##### ①墳丘東側 (Fig. 6、PL. 8 - 3)

第1トレンチは幅1mで墳丘南北主軸から最終的に20.5m東へ延ばした。

第1トレンチ

土層断面を見るとまず、墳丘裾から3mほどのところにわずかに下がる場所がある。この間、敷石の痕跡はない。そしてそこからさらに0.5mほど離れたところで逆に1段上がって見える場所がある。調査記録を全体的に見たところ、このくぼみのあたりは調査時に正しく掘れていないと判断でき、平面図にある溝SD09が断面図にどう見えているかわからない。調査段階では掘り過ぎが認識されていたが、SD09以東はむしろ十分に掘れていなかったか分層を誤った可能性もあろう。

しかし、概報作製時には注意していなかったが、遺構検出段階で幅0.5m、深さ0.2m前後のSD09が確かにみつけれられている。そして、くぼみを越えて1段上がっているのも確かであろう。そしてこの段にまたがって存在する9層は地山ではなく、古墳築造以後の堆積層であろう。ただし、これにはバラスがほとんど含まれていない。これに対して、墳丘側は7層までが地山で、その上の6層と5層は整地層とみなせる。墳丘東側が低くなっていることに対する処置とみられよう。この整地の範囲の東端に沿ってSD09が設定され、その埋土が10層や11層になっているために、不自然な層序が記録されたと考えられる。このうち11層は地山の表層近くが10層の影響を受けて変化しただけにすぎず、10層だけが溝の埋土であったかもしれない。

SD09

ところで、さらに外側に4mほど離れたところでも、0.2mほどの溝状のくぼみがみついている。当初これについては性格がわからなかったが、9層の上から切り込まれたものであるもので、古墳とは関係ないと判断される。その外側には現代の畑の排水溝が斜めにかかっている。

第1トレンチでは墳丘外側には明確な敷石の痕跡はなかった。ただし、3層にはバラスが多く含まれていて、葺石に由来するものだけでなく、外周平坦面の敷石に由来するものも含まれているのかもしれない。だが、9層に含まれていないのはやや問題である。9層と10層の層位的関係如何によっては、9層が地山になる可能性も残されている。

外周平坦面

以上の第1トレンチで検出された古墳に関する遺構はSD09とそれによって画される外周平坦面だけである。溝心まで墳丘基底部からは約3.2mである。幅0.5mでトレンチに直交して検出されたが、先にも述べたように正確な断面形はつかめていない。礫を詰めた痕跡も認められない。

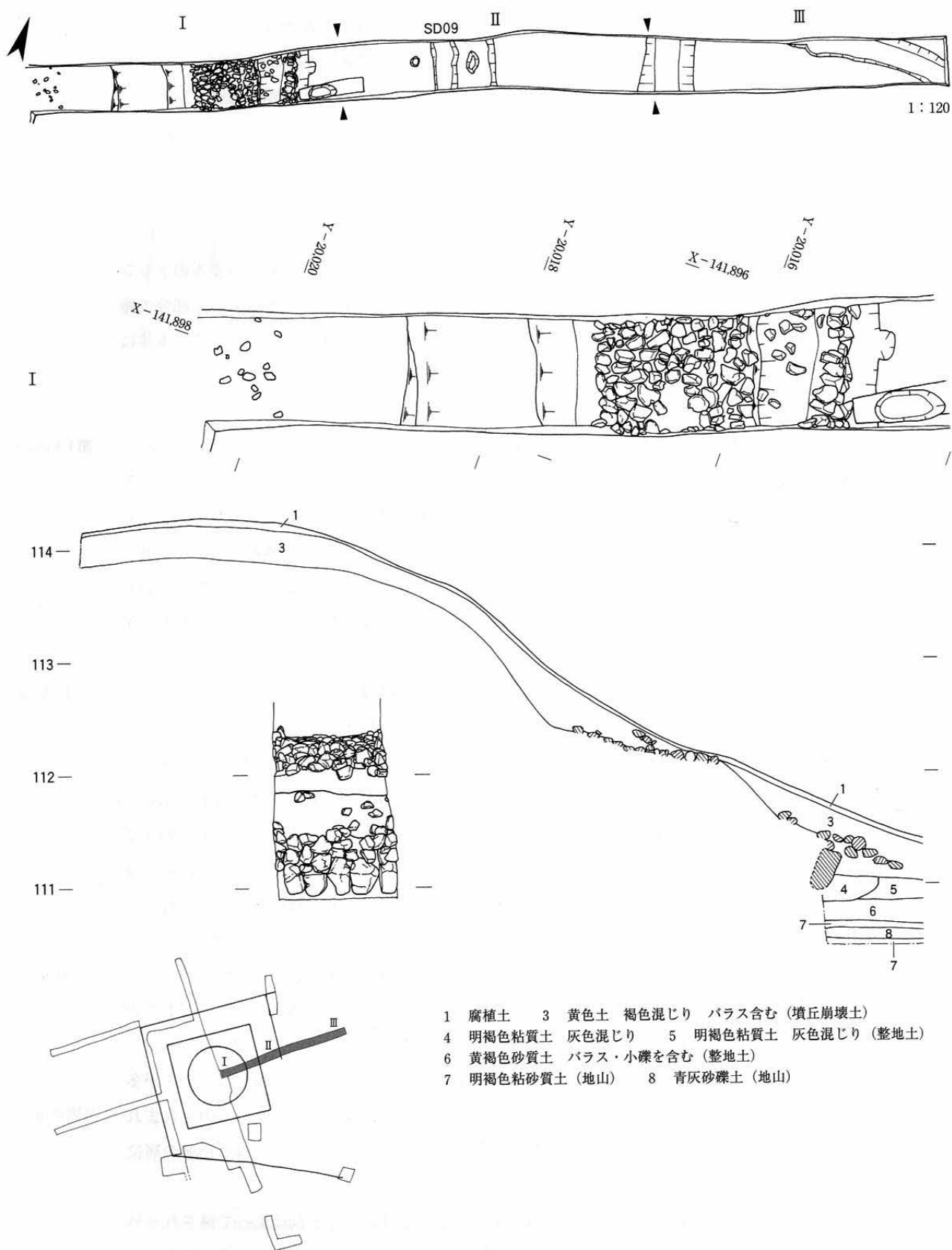
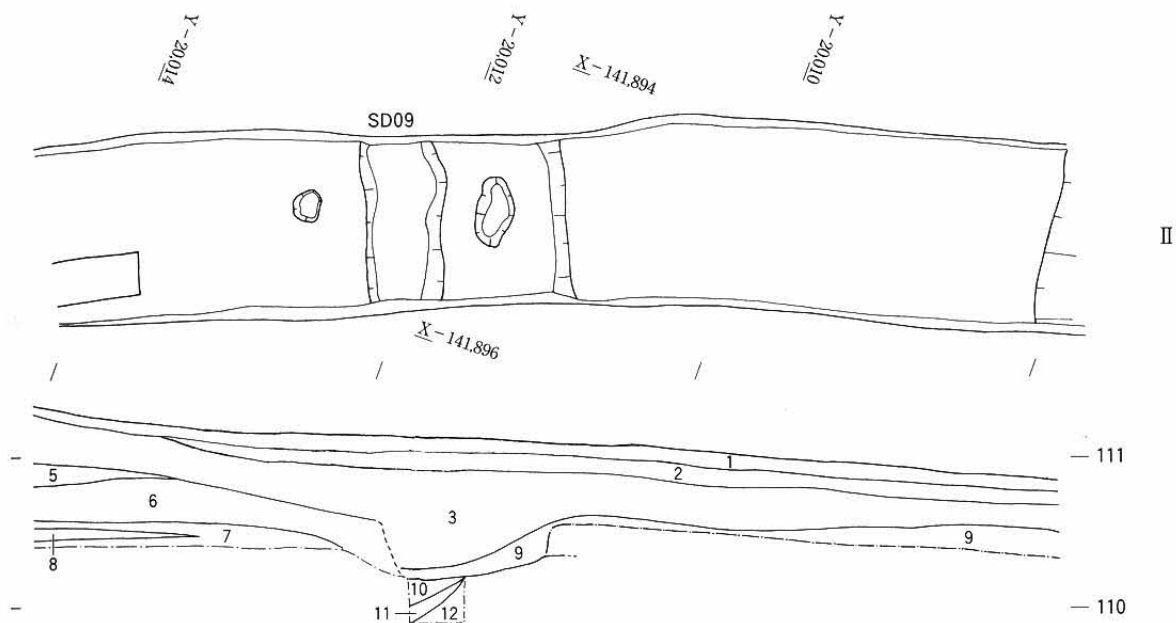
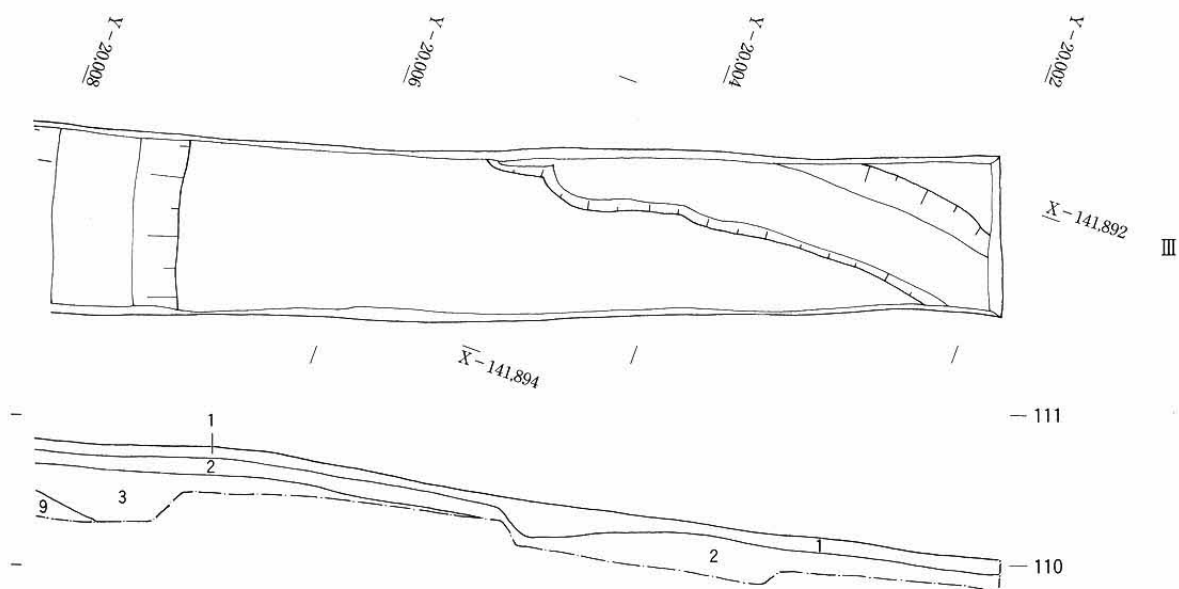


Fig. 6 石のカラト古墳 第1トレンチ平面・断面図 1:50



- 1 腐植土 2 黄色土 3 黄色土 褐色混じり バラス含む (墳丘崩壊土)  
 5 明褐色粘質土 灰色混じり (整地土) 6 黄褐色砂質土 バラス・小礫を含む (整地土)  
 7 明褐色粘砂質土 (地山) 8 青灰砂礫土 (地山) 9 明褐色粘砂質土  
 10 灰色粘土 褐色混じり (SD09埋土) 11 灰色粘土 (SD09埋土?)  
 12 灰色粘土 褐色混じり (地山)



- 1 腐植土 2 黄色土 3 黄色土 褐色混じり バラス含む (墳丘崩壊土)  
 9 明褐色粘砂質土

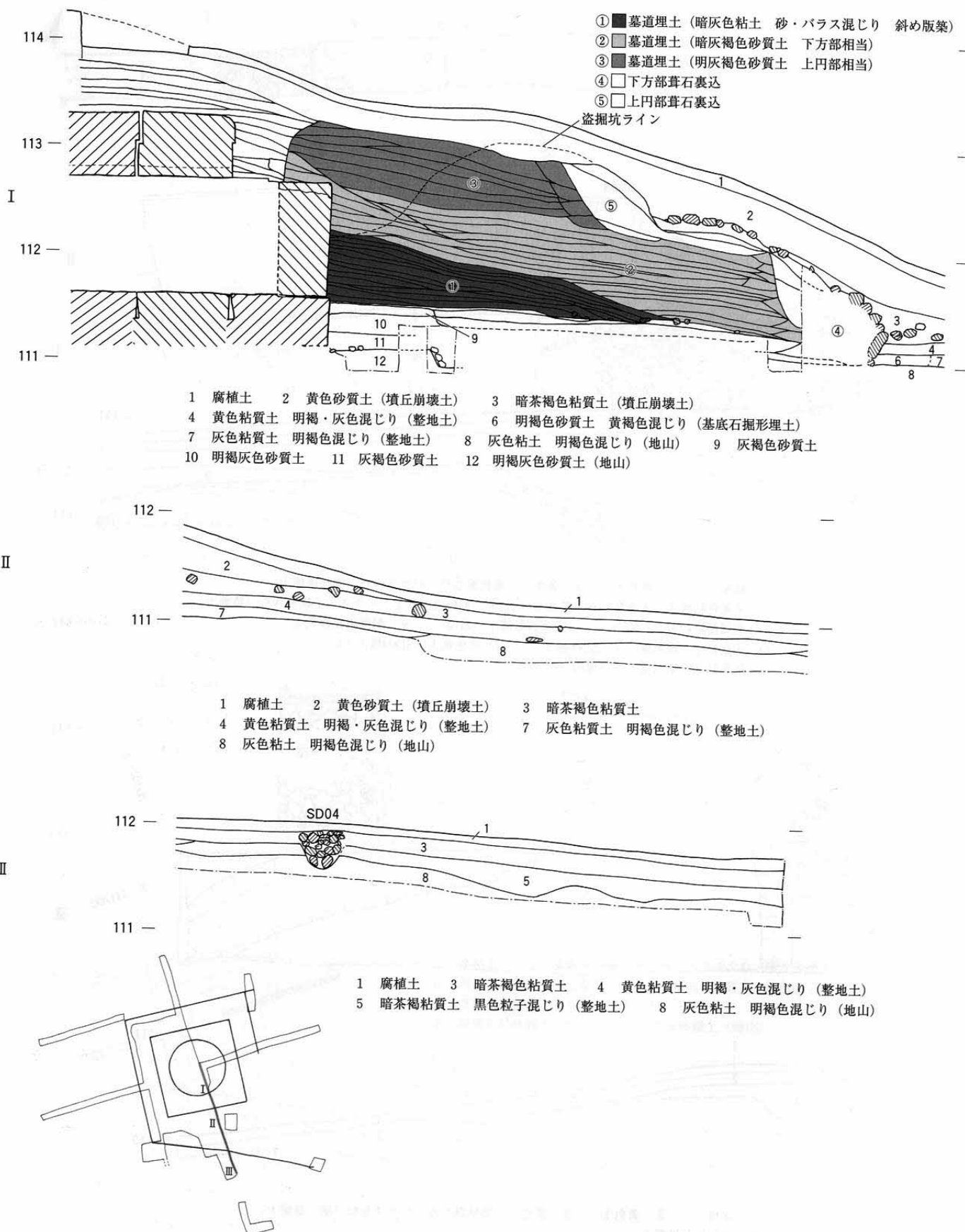


Fig. 7 石のカラト古墳 第2トレンチ・墓道埋土断面図 1:50



## ②墳丘南側 (Fig.2・3・7～9、PL.4-1・7-2・7-3・7-5)

墳丘の南側に延ばした第2トレンチは墳丘中心より19.2mの長さ達し、幅は排水溝の検出にともなって2m、4mと適宜拡幅した。また、北半は墳丘西半部の全面調査のためにさらに広げられた。その過程で、捉えられたり、予測されたりした排水溝の存在を確認するために、第6トレンチ・第7トレンチ・第10トレンチがあげられた。

第2トレンチは、ちょうど墓道にあたる部分を断ち割った形で入れられたが、墳丘裾部分だけは遺構の保全を考えて残してある。まず、土層について見てみると、墳丘外は8層が地山で7層に加え黒色粒子をまじえる暗茶褐色粘質土の5層と黄色粘質土の4層が整地層と考えられる。東側同様、地形が低くなっていることとともに、南側に広い平坦地を用意することが意識されたのであろう。平面図との対応を考えると、トレンチの東壁にはSD02とSD04がともに現れるはずであるが、SD02については断面ではとらえられていない。また、SD04は、他のトレンチでもままた観察されたが、礫を詰めているため、まわりの土が流れて土手状に礫が残ったように見えている。

第2トレンチ

平面で見ると、第2トレンチを拡張する前に、すでに排水溝SD01がみつかり、墳丘南西部分を広く掘る中で、平行して走るSD02が途中で折れてSD01の南端を斜めに横切ることがわかった。墳丘裾からその接続地点までのSD01の長さは約2.8m、幅は平均0.5mを計る。SD02の南北辺は2.2m、斜めの辺は5.0mほど延びて、第2トレンチの東の壁に潜る。幅は0.4mを計る。

墳丘下排水溝

また、SD01をはさんでSD02の南北辺と対称の位置に排水溝の有無を確認するために第10トレンチを設定した結果、SD03を検出した。おそらくSD01同様、墳丘の下から続いているものと思われるが、トレンチ内では長さ1.9mほどで礫詰が途切れ、本来それより南に延びていたかどうか分からない。幅は0.4mである。ただし南東に走るSD02の続き具合からすれば、それと合流するように作られていたと見るのが妥当であり、後世にその部分が流れてしまったものと思われる。

第10トレンチ

これらはSD01が墳丘主軸上に築かれ、その東西に心線で3.5mずつ離れてSD02とSD03が平行に設定されたもので、すべての水が、南東向きのSD02に流れ込み、より遠くへ排水されるしくみになっていたことがわかる。

第2トレンチではさらに南でSD04を検出した。これも詰められた礫が土手状に盛り上がって残っていたものであった。幅は0.5～0.6mで、トレンチ内いっばいに4.2mの長さにわたって続いていた。この延長を東西で確認するために第6トレンチと第7トレンチを設定したのである。

第6トレンチ (Fig.8) は後述の墳丘西側第3トレンチで検出したSD05とSD04が合流するとみられるところに方形にあけたもので、想定どおり礫の詰まったSD04がトレンチ北辺に斜めに重なるようにみつかった。そしてSD04にはほぼ平行に数十cmの間隔を置いて、南側に段差がわずかにつけられていることが確認できた。それは西の端では北に向きを変えているように観察され、SD04の礫詰はそれを越えることなく、SD04は検出できたもっとも西の端でSD05に接続するように設定されていたことが考えられる。北壁の断面図からは、そのすぐ西から地山が急に上昇していくことが読み取れる。

第6トレンチ

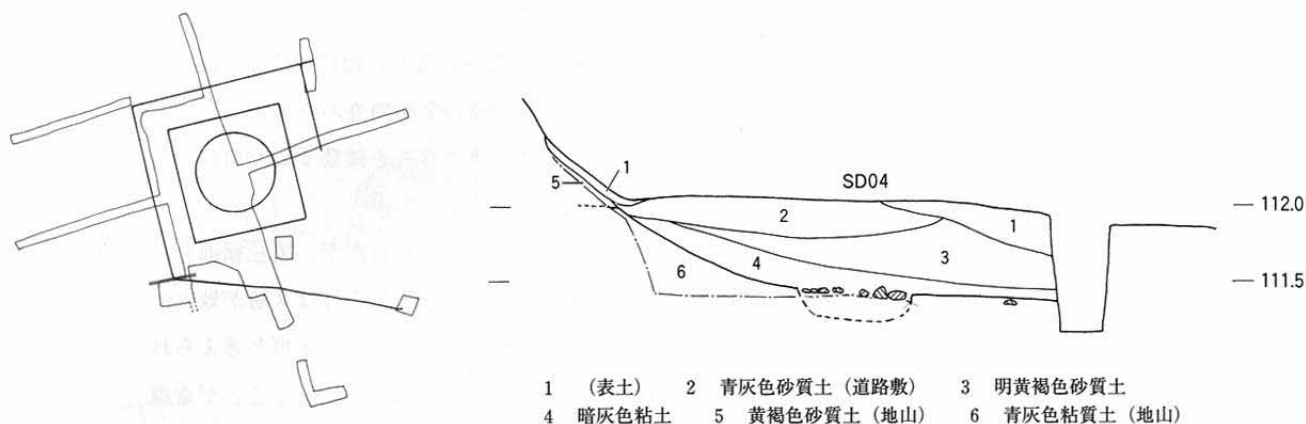


Fig. 8 石のカラト古墳 第6トレンチ断面図 1:50

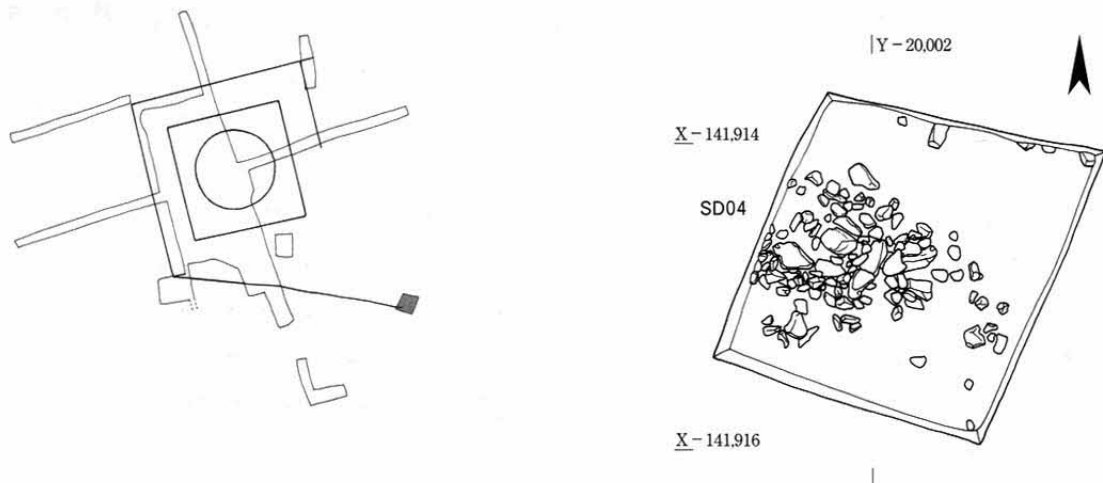


Fig. 9 石のカラト古墳 第7トレンチ平面図 1:50

第7トレンチ SD04の反対側の端は第7トレンチで確認した (Fig.9)。しかし、そこでは礫詰が崩れて失われかけている様子が検出されたにすぎず、本来さらに延びていっていたものと考えられる。その範囲までのSD04の総延長は27.6mとなる。全体として見ると、墳丘の中軸ライン付近で、やや向きを変えているようにも見える。SD02同様、この南東方向の向きは地盤の等高線に対して直交する方向を選んで決められたのであろう。

ところで、墳丘の南側一帯には敷石の痕跡がなく、第1トレンチで調べた墳丘東側の状況と変わらない。しかし、各排水溝の礫だけが露出してその回りはすべて整地土が剥き出しになっていたと考えるのは不自然であろう。正面から見て背後にあたる北面や西面の外周平坦面だけが舗装されることも理にかなわない。したがって、本来あった敷石が失われたと考えたい。

### ③墳丘西側 (Fig. 10・11, PL.7-1・8-2)

墳丘西側の様子を確かめるために、平行する2本のトレンチを設定した。それらの間隔は約10.5mである。第3トレンチは墳丘中心から西に向けて総延長26.5mにおよぶ長いもので、第5

トレンチは墳丘周囲の平坦部のさらに外側部分についてのみ調べたものである。第3トレンチの墳丘及び外周平坦面部分は第2トレンチ同様のちに拡張された。

まず第3トレンチの調査成果から見てみよう。そこでは、まず意外なことに墳丘裾から約4m西側にある土手状の高まりが、その外側を水田にしたときの改作によるものであり、その真下には何ら盛り上がるような遺構が残っていないことが明らかになった。図で3層、4層、7層、8層、9層と分けたものが整地層である可能性も完全には否定できないが、トレンチ西端の1.5m以上の大きな地山のカットを見れば、この部分は削り出しによって成形されたものとみられ、上記各層は地山の中の細分とみなす方がよいだろう。トレンチほぼ中央付近に溝状の遺構があるが、断面を見ると幅の広いものであることがわかる。おそらく古墳とは関係ない。

第3トレンチ

そしてトレンチ西端の大きなカットも古墳の造営とは関係ないと考えられる。おそらく、今では水田面となっているが、もともと丘陵斜面であったところを水田か畑地などの可耕地にするときに改変した比較的新しい時期の所産であろう。実際に古墳を造るにあたって、外周平坦面を確保するために削り出された地山が、トレンチ中央付近から東に広がる7層で、その上面の傾斜がよりきつくなる13層西端付近が古墳造営のためのカットが入ったところで、10層が露出するところまで削り込まれたのであろう。この10層を切り込む幅0.3mのSD05とその内側に幅0.8mのSD07を検出した。

西側の  
カット

第5トレンチでも第3トレンチ同様、土手状の盛り上がりは旧地形を反映したものではないことが確かめられた。西半を見ると水田に関係する2層の下は、かなり複雑で中ほどで1段東へ下がるとしばらく地山が安定する。しかし、それが古墳時代の造作かどうかは不確かである。古墳に関係する可能性のある造作は、10層から11層にかけての法面であるが、東端のレベルは古墳の周囲の平坦面よりもかなり高く疑問を残す。全体のプランを考えると、この第5トレンチには墳丘周囲の平坦面は及ばないことが明らかなので、レベルから言っても第5トレンチ東端付近のⅡ層上面の地山面はもう一度トレンチ外で下降しなければ外周平坦面へ接続しないことが予測できる。

第5トレンチ

さて、墳丘西側の外周平坦面には先に述べたようにSD05とSD07の2条の南北方向排水溝が検出された(Fig.2)。SD05は第3トレンチの当初の幅での検出であったが、その南への延長が第6トレンチのSD04の西端にちょうど一致することから、墳丘裾から約3mの一定幅をあけて直線的に設けられていることが想像できる。西側からの水の流入に備える目的があったのだろう。中には礫が充填されている。

SD05

これに対して、SD07はその北半が拡張した墳丘トレンチの西壁に沿うように検出されたため、きれいには掘れていない。その理由のひとつに壁際に設定した発掘用排水溝がSD07に重なってしまったことがある。そして、南半についてはその排水溝によって壊してしまった部分が多く、まともに検出さえできていない。

SD07

さらに、外周平坦面全体に敷かれた敷石がこの検出を難しくしていた。この敷石を残すために、実際に検出したのは4.4mほどであった。しかしこの範囲であっても、墳丘裾と平行していないことがわかる。

断ち割りの結果、SD07に詰まっている礫は周囲の敷石が落ち込んだとも受け取れる堆積状況であった。つまり、開渠であった可能性がある。そして、SD05に比べれば二次的な排

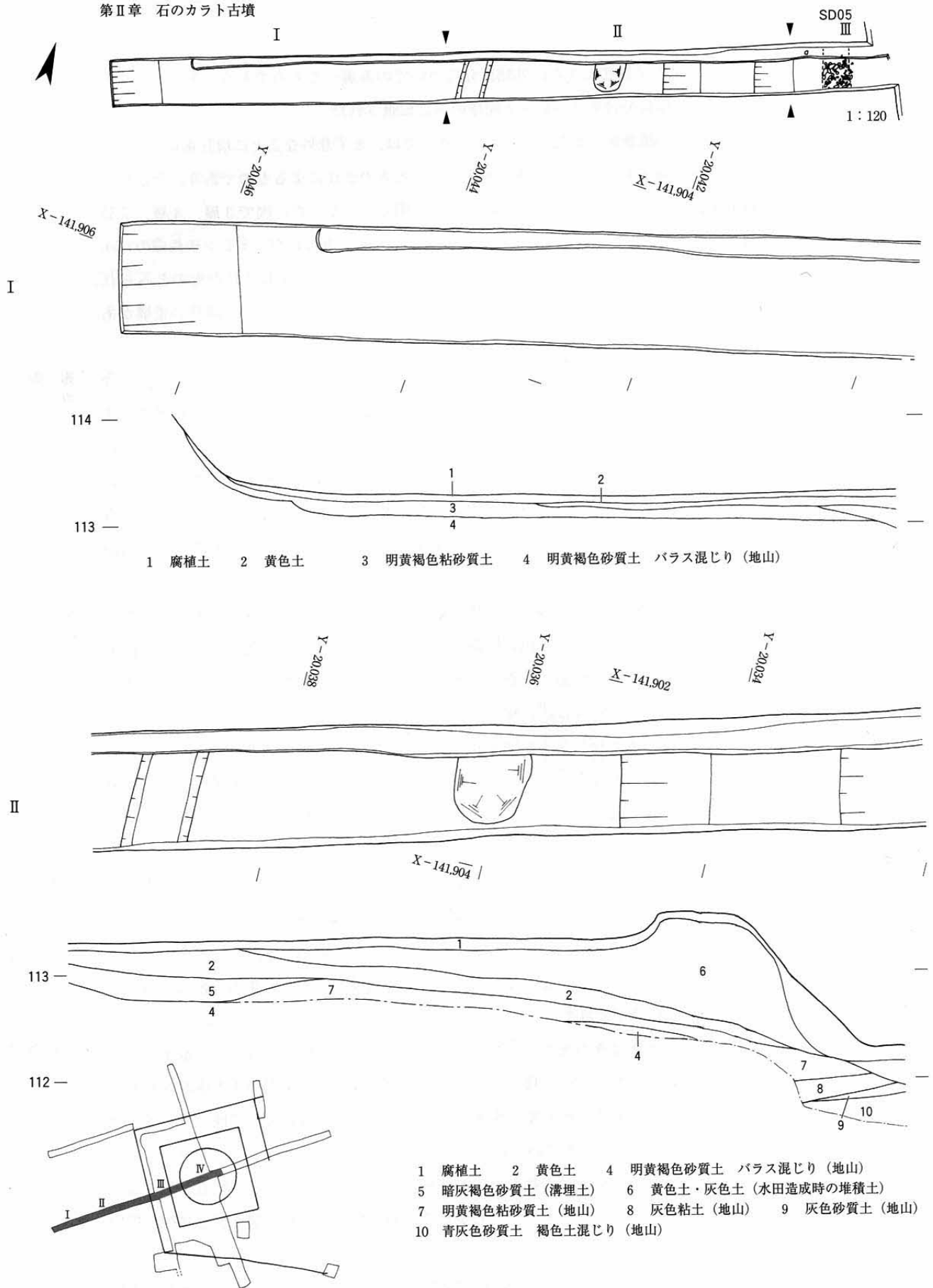
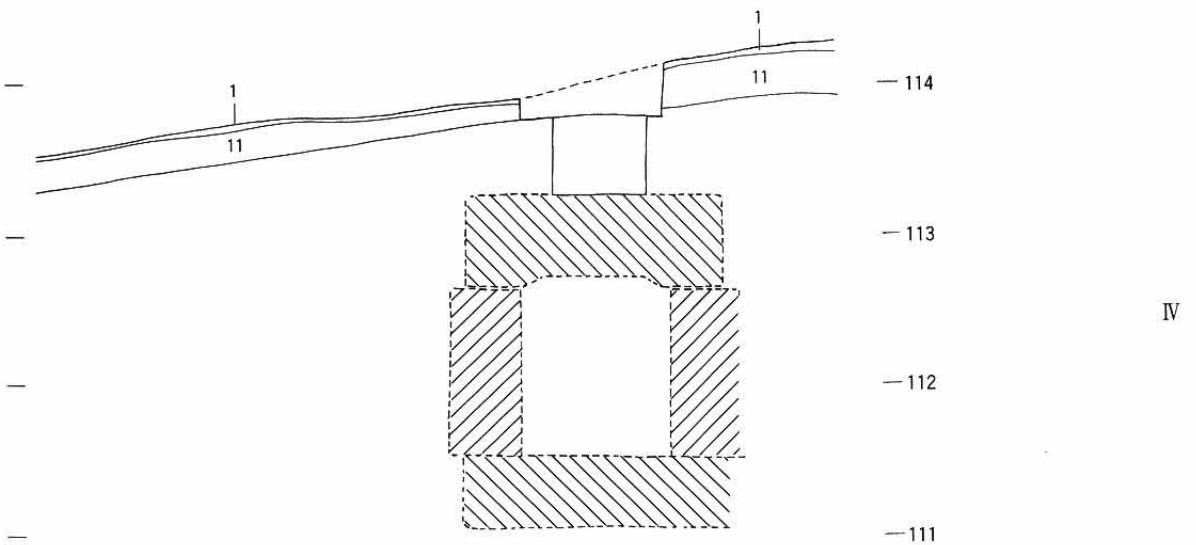
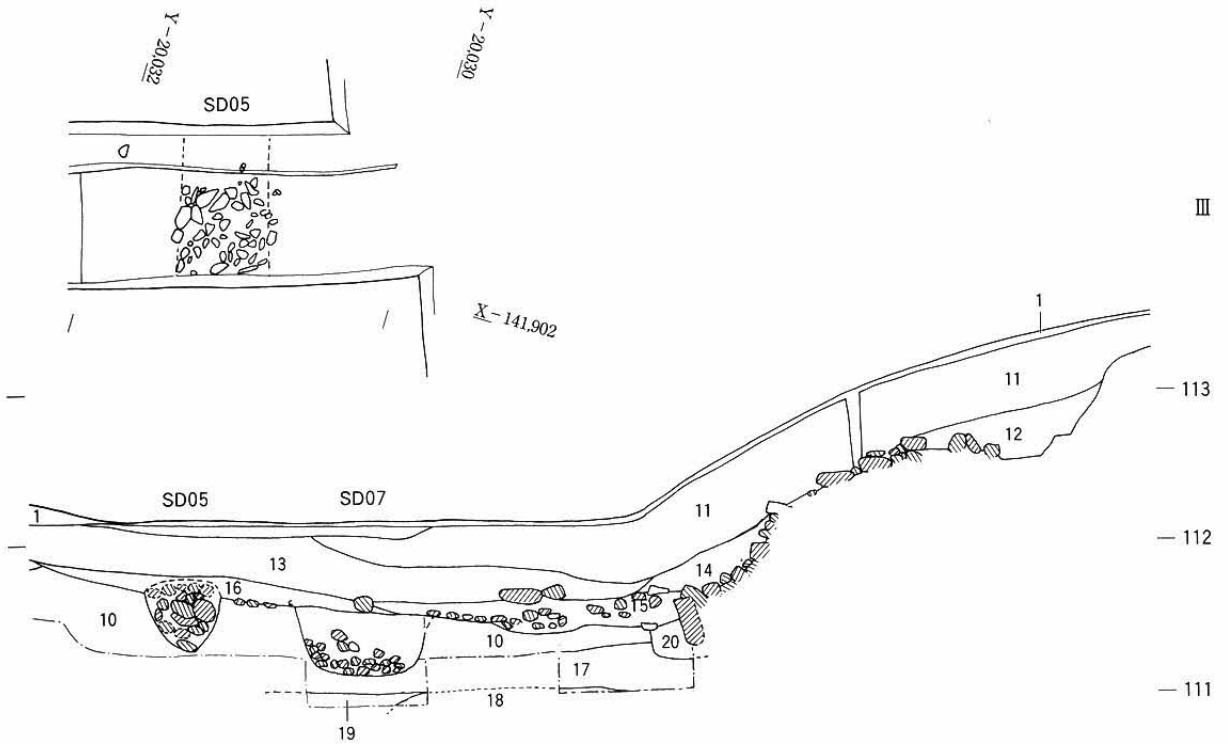


Fig. 10 石のカラト古墳 第3トレンチ平面・断面図 1:50



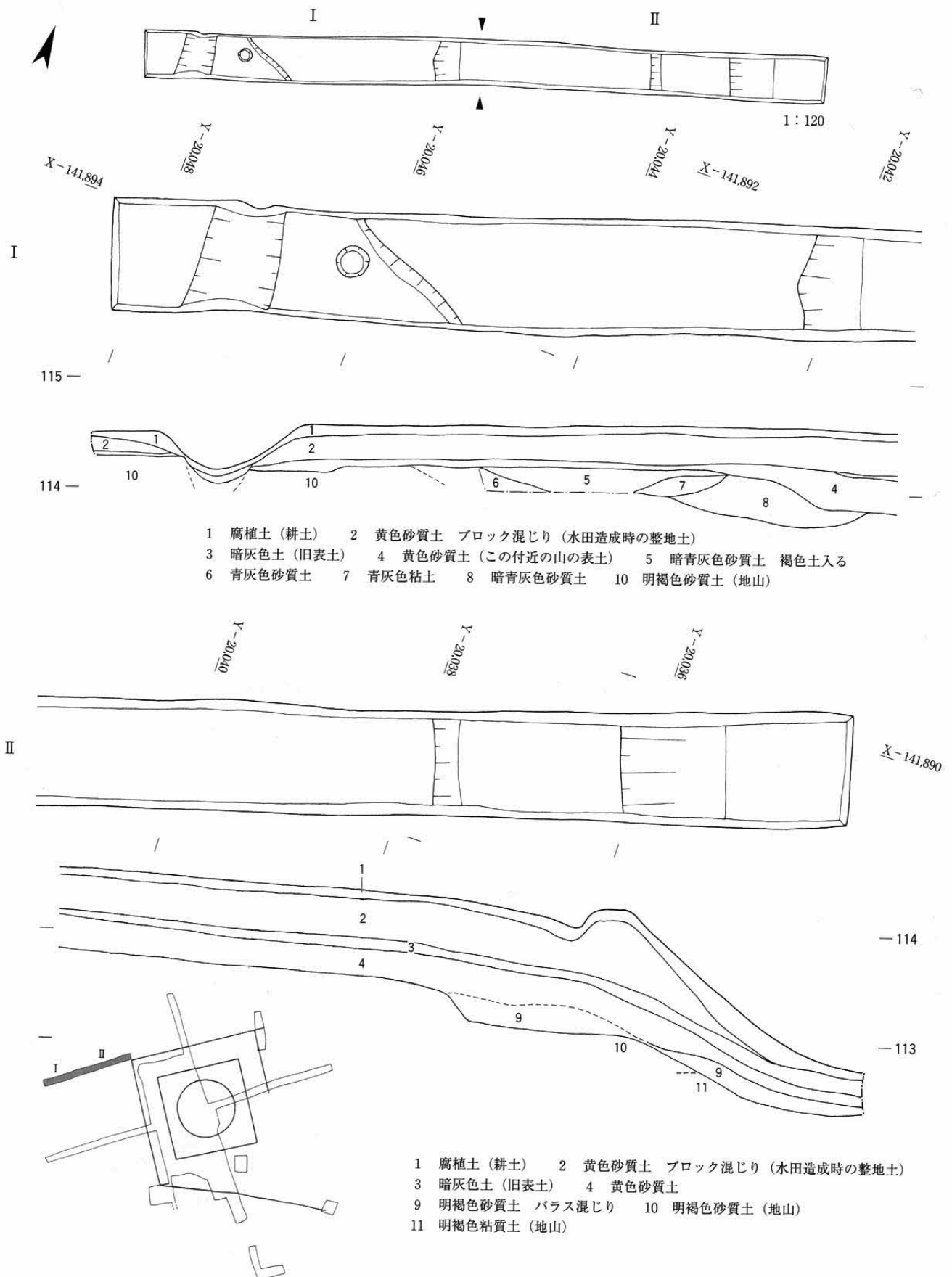


Fig. 11 石のカラト古墳 第5トレンチ平面・断面図 1:50



水溝であったことが窺われる。

外周平坦面の敷石は墳丘葺石に比べ小さく径10cmくらいの比較的平たいものを用いているが、場所によっては先にバラスを敷いてその上に、玉石をかぶせているように観察されるところがある。

外周平坦面  
敷石

④墳丘北側 (Fig. 12・13, PL. 7-4・8-1)

第4トレンチ

第4トレンチは、主軸に沿って北へ一度設定したトレンチをさらに延長し、墳丘中心より19mの地点まで設定したことになった。ここでは、内部にぎっしり礫の詰まったSD06と平面では敷石面と重なってとらえにくいSD08を検出した。

断面図によると地形は地表面からの溝状のくぼみが入るあたりから西へはゆるやかに地山があがっていくことが確認でき、そこには手は加わっていないとみられる。ここでも外周平坦面を覆う8層が途切れる地点から地形の改変が地山になされ、13層が露出するまで下げられてから少し内側にSD06が設けられていることがわかる。しかし、SD08は13層の上面からではなく、1層上の11層上面から切り込まれているのである。この11層は地山の12層とは異なることから整地層とみられる。11層はSD06のところで途切れている。

北側の  
カット

2条の排水溝のうち、北側のSD06はまたも敷石面より浮き上がって検出された。したがって、これは北側から墳丘側に向かって流れ込む雨水や湧き水を排水するものであったろう。SD05と同じく墳丘裾から約3mのところを平行に走っていることからすると、外周平坦面の北西隅でSD05とSD06はつながっていたと想像できる。

SD06

SD08はSD07同様、調査区の北壁際での検出となった。敷石の残りがよい外周平坦面での検出となった。6.6mほど検出した範囲でみると、やはり墳丘裾とは平行でなくややぶれながら東西に設定されていることがわかる。SD07同様、内部をすべて礫で充填するのではなく、底にのみ礫が認められるのは、開渠だった可能性も含め、二次的な溝であったことを示しているよう。外周平坦面の敷石は西へいくほどしっかりと残っており、反対に墳丘中軸に近いところではまばらであった。

SD08

外周平坦面  
に敷石

北面の2条の排水溝の延長を検出するために東に離れて南北方向に設けたのが第8トレンチである (Fig. 13)。トレンチ中央、現地表下約30cmで排水溝に詰められた石が検出された。位置的にSD06の延長部分とみられる。これは本来さらに東へと続いていたことは確実であるが、出土状況からすれば遺構としてこれ以上東にはっきりと捉えるのが難しそうな状況であった。なお、SD06の南にある斜行する溝は古墳と関係ない。

第8トレンチ

以上の調査所見を総合すると、墳丘周囲については次のような知見をまとめることができる。

まず、東南に向かって緩やかに傾斜する地形にあって、平坦地ができるだけ広く確保できる場所を選ぶ。そして、とくに西側の尾根に沿いながら、西側と北側を鉤形に削り出し、続いて、東側や南側に整地を施し、敷石を載せる面を作っている。敷石が本来、北と西にだけあったのか四周同じようにあったのかはわからなかったが、景観や実習された儀礼などを考えると四周にあった可能性が高いだろう。

墳丘周囲  
のまとめ

墳丘構築、埋葬行為などとの関係は後述するが、敷石をする前にもっとも外側の排水溝を南を除いて墳丘裾より一定幅あけて平坦面の周囲にコの字形にめぐらし、南のSD04のみ等高線に直交するように南東へ長く延ばす。これらは主として西や北から流入ないし、浸み出して

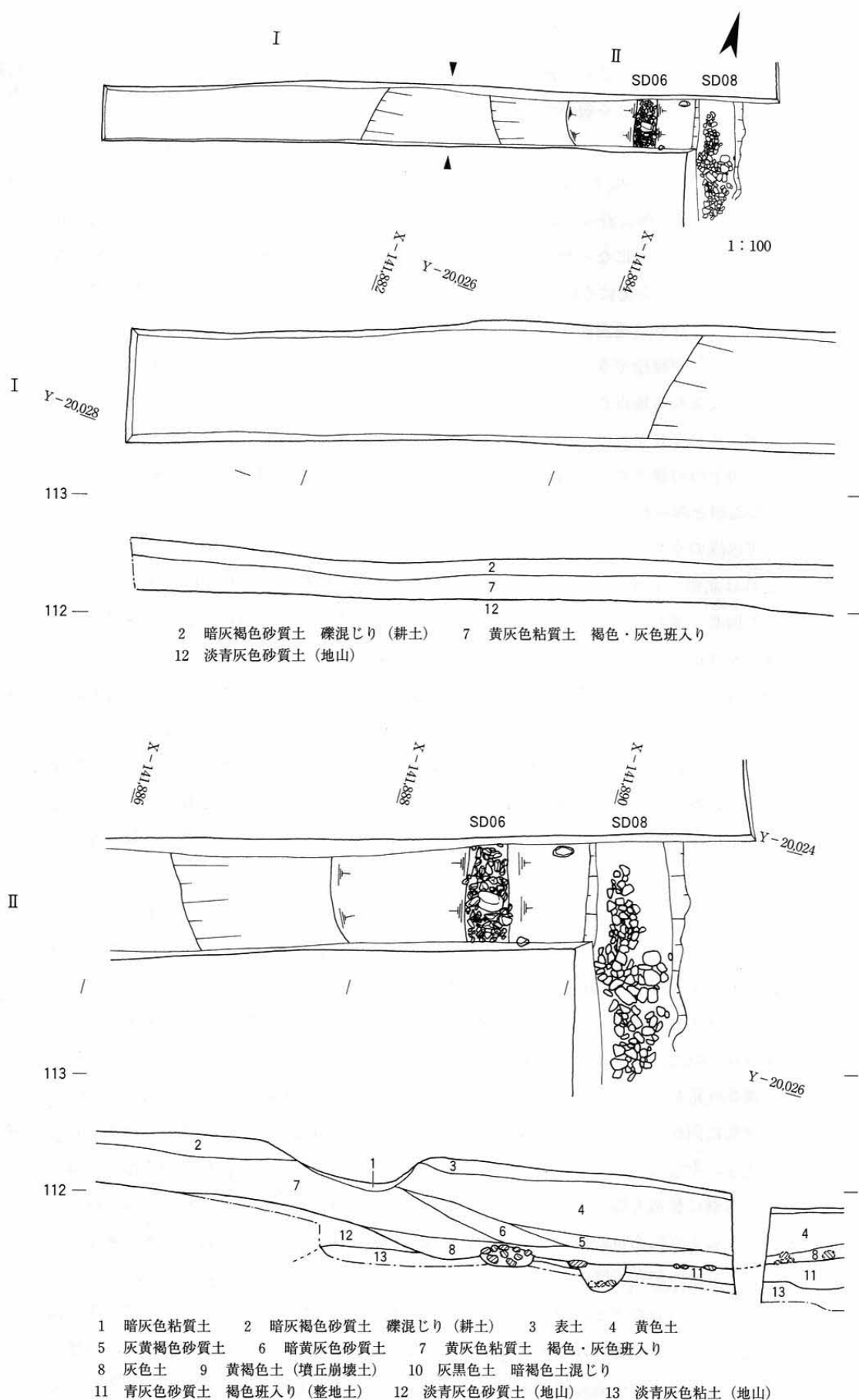
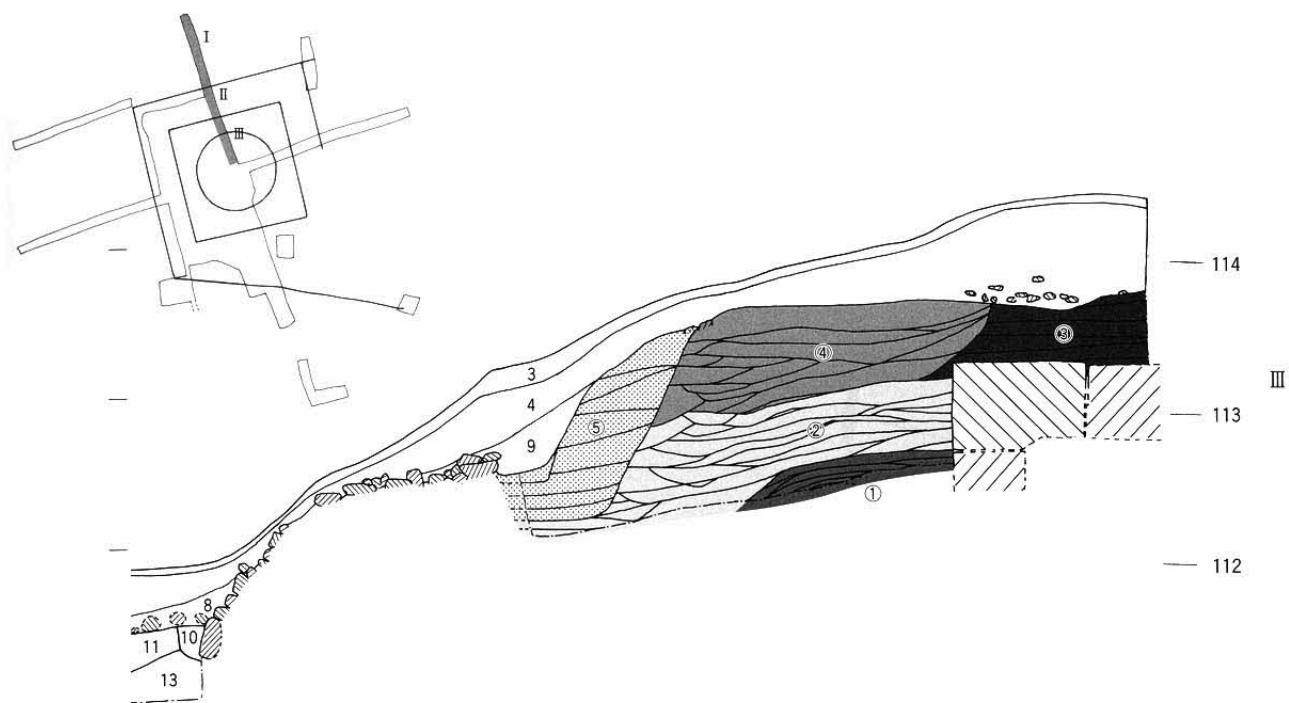


Fig. 12 石のカラト古墳 第4トレンチ平面・断面図 1:50



- |                           |                       |
|---------------------------|-----------------------|
| 3 腐植土                     | ① 墳丘版築盛土 (褐色・灰色粘土)    |
| 4 黄色土                     | ② 墳丘版築盛土 (黄褐色・灰褐色砂質土) |
| 8 灰色土                     | ③ 墳丘版築盛土 (黄褐色砂質土)     |
| 9 黄褐色土 (墳丘崩壊土)            | ④ 墳丘版築盛土 (黄褐色砂質土)     |
| 10 灰黑色土 暗褐色土混じり (基底石掘形埋土) | ⑤ 墳丘盛土 (灰褐色砂質土)       |
| 11 青灰色砂質土 褐色斑入り (整地土)     |                       |
| 13 淡青灰色粘土 (地山)            |                       |

くる水を受けるために設けられたメインの排水溝であろう。

いっぽう、これらの内側に設けられたSD07とSD08の2本の排水溝は、二次的ないし補助的なものであった。北側と西側とともに外側の排水溝と比べて底面のレベルは明らかに低く、かつ礫詰の状態も異なる。開渠であった可能性も考えられるのである。その方向も、規格的でないことから、必要に応じて応急的に掘り足されたものかもしれない。それぞれはコーナーで連結するようなものではなく、末端は外側の溝に斜めにつながったり、消失したりするようなものではなかっただろうか。

なお、墳丘下部から延びる排水溝が設けられていることも明らかになった。これらは、いずれも墳丘造営に先立って設営されたものであり、3本の溝は墳丘を縦に4分割する南北方向のラインに沿っている。それぞれの排水は、内角で105度の方向へ東に折れたSD02に合流するしくみになっていた。後にも述べるが、中央のSD01は墓道部分のコロレール抜き取り跡の下で確認したところ、石槨の南端より1mのところから始まるものであることが確かめられた。石槨の底板を設置したあと、幅0.6m、深さ0.2mの溝を掘り込み、礫を詰め込んで造られている。その礫には大小のものを混ぜるが、南端でSD02と連結する部分のみ小さめの礫を多く用いている。ここではSD02の方が低く掘り込まれていた。SD01の総延長は7.4mである。

#### ⑤第9トレンチ (Fig. 14, PL.8-4)

#### 第9トレンチ

墳丘から南へ30mほど離れたところにある逆L字形の小さな土塁状の高まりに対して、正L字形の調査区を設定して調べた。地山の上に2層の黄色砂質土が堆積していることがわかるが、

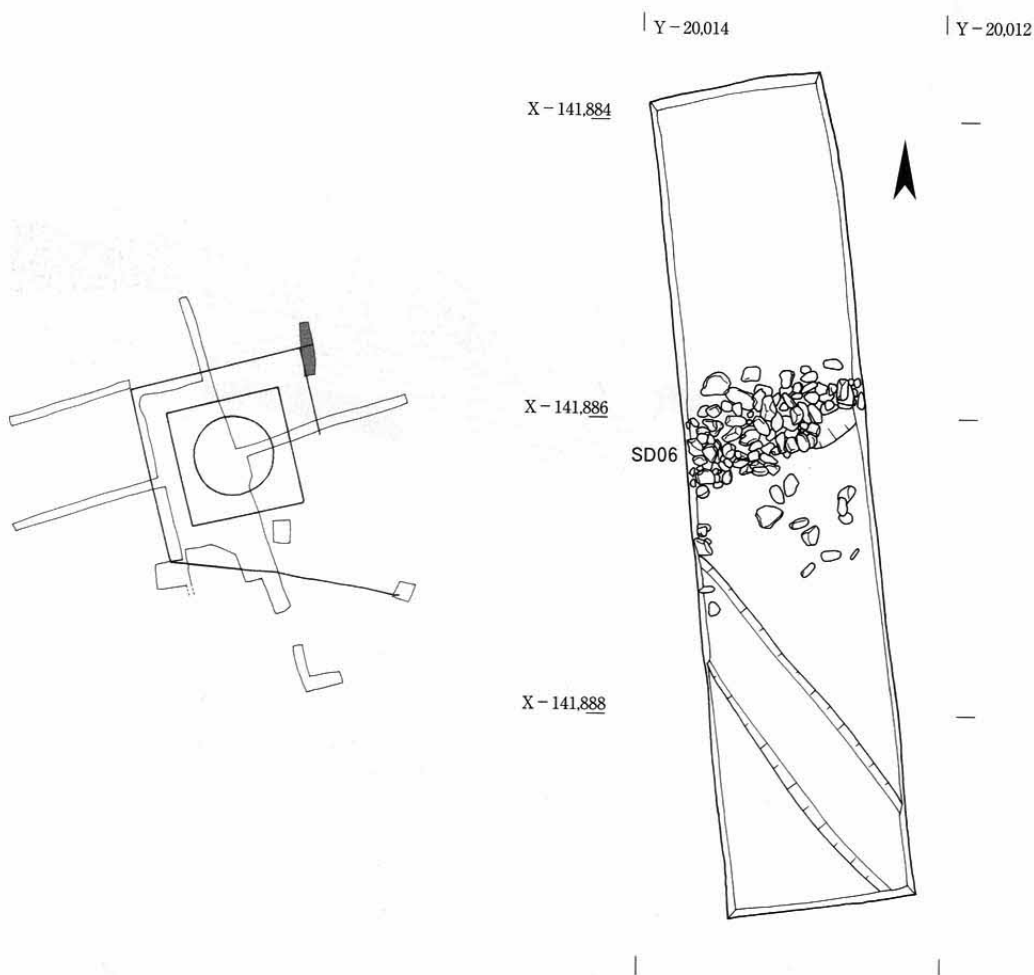


Fig. 13 石のカラト古墳 第8トレンチ平面図 1:50

時期や性格はまったくわからなかった。古墳とは直接関係ないものと判断され、その付近にまで整地が及んでいる形跡は確かめられなかった。

(2) 墳丘の調査 (Fig. 3・6・7・10・12・15、PL.6)

すでに記したように墳丘部分については、西半分を広く発掘したほか、第1～4トレンチでは墳丘部分に限って、部分的に断ち割り調査を実施し、その構造を把握しようとした。

①外表施設

**葺石** 上円部墳丘は墳頂に近いところで葺石に使用された可能性のある石がわずかに散乱していたが、総対的に表面を削られて旧状を留めていないもようであった。これに対して、下方部はその上面に敷かれた石から葺石の基底石に至るまで一部間に透いたところがあるがよく残っていて、古墳築造当時の姿をよく留めている。

なお、上円部に本当に葺石があったかどうかが問題である。検出した状態を見ると、北面で1ヶ所テラス面より低いところで上円部葺石の基底部分と思われる礫群を認めたが (Fig. 3)、そこ以外は上円部盛土残存部と下方部テラス敷石内縁との間が一様に1段くぼむように掘り上

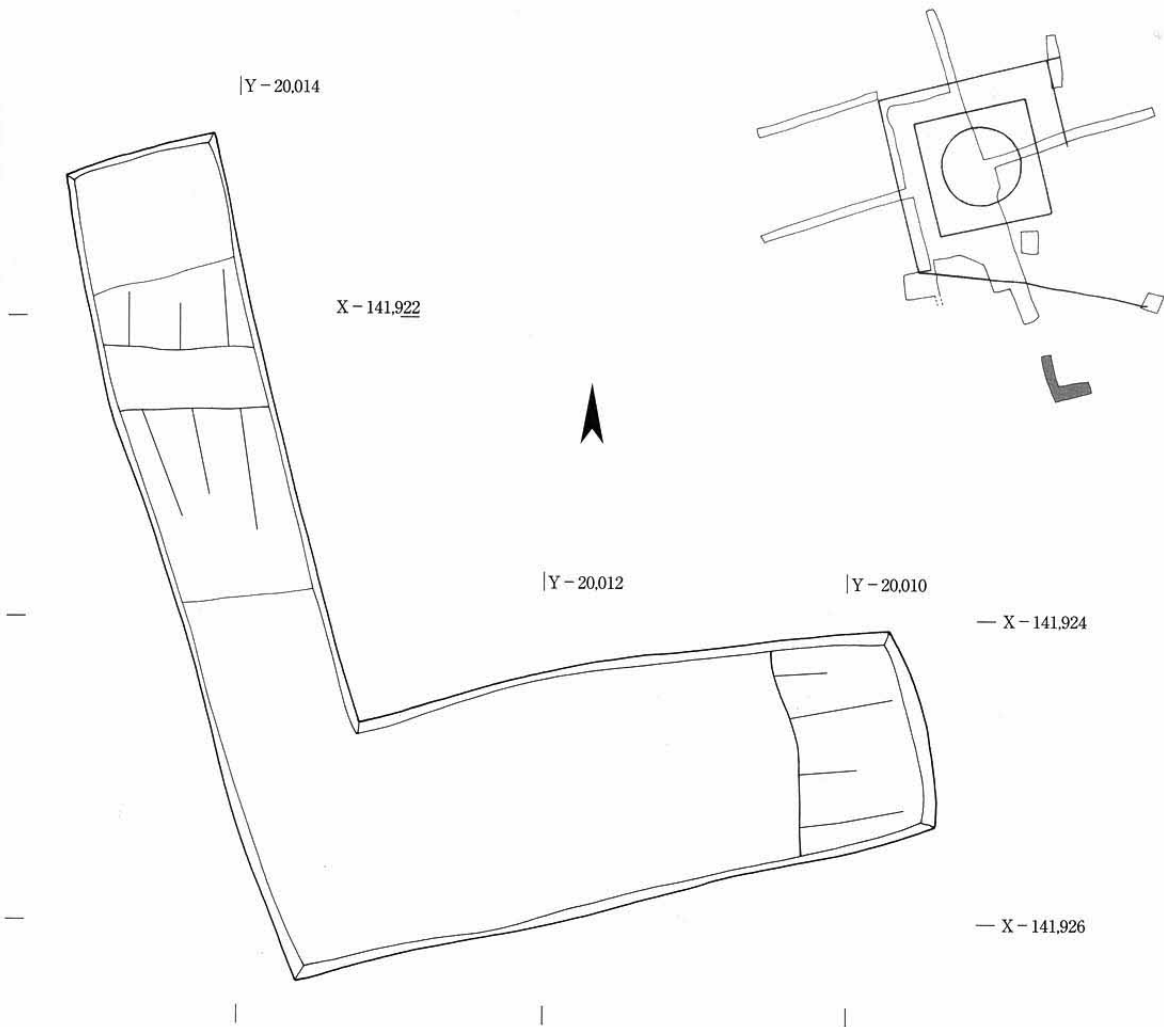


Fig. 14 石のカラト古墳 第9トレンチ平面図 1:50

がった。そこには墳丘の崩落土が詰まっているが (Fig. 12)、そこだけが決めるのは理解しがたい。また、後に述べるように、墳丘の築成過程を見ると、外側には何らかの土留めを施していくことが必要となる工法を採用していることから、本来上円部の外表にも裏込めをとまなう石があったものと判断される。これは葺石というより擁石と呼ぶものに該当しよう (高橋2002)。

上円部にも  
葺石

そうすると、第1トレンチの墳頂付近にあった石や、石槨内部に投げ込まれた相当量の礫石がその名残であるかもしれない。したがって、現状はそれらが裏込めとともに抜け落ちた状態とみられ、上円部の裾の径は下方部上面の敷石が途切れるところでおさえられる。その場合、テラスの幅1.4m以上で上円部径は9.7mとなる。ちなみに、上円部残存径は9.1mである。

葺石は十字トレンチの各断ち割り断面によくその葺き方が現れている。まず、裾のラインから0.2~0.4mほど外側から掘り込んだ布掘り状据付掘形の中に縦長の基底石を縦使いにして並べることから始まる。基底石の大きさは長さ25cmほどである。ただし、隅角の基底石は直角に近い2面をもつ特別に大きい石を立てて使って要としている。その後、掘形を埋めると、本来縦長の基底石が普通の丸、ないし四角い石のように見えるようになる。その上に基底から数十cm

基底石

墳丘のコア部分の外側をいったん削り立てる所作をしていることが注意されよう。

また、墳丘裾から1 m以上のところは確実に敷き並べており、敷石と呼ぶべき状態にあるが、小口積みからの移行部分はやや不鮮明である。外見上境目が目立たないように石の置き方を変えていったものと思われるが、その部分がちょうど抜け落ちた残存状況にある。斜面の葺石とテラスの敷石の石材を比べるとあまり大きな差はないが、葺石に対して敷石は石材の広い面を上に向けて並べられている。施工単位や区画の目地はともに確認しがたい。

#### 四隅の溝

敷石についてもうひとつ注目されるのが、北西と南西隅テラスに石を2列に縦に並べて作った斜め45度の溝状部分である。本来、下方部四隅すべてにあったとみて間違いはない。木材など腐朽しやすい部材を置いて、細長い石を横向きに沿わせてから周囲に石を敷いたのだろう。自ずと敷石の施工が分割されることはわかるが、その後どうして溝状に残したのかはわからない。水道として利用した可能性もあるが、斜面の葺石部分に垂れ流すことになり中途半端である。類例の増加を待ちたい。

#### ②墳丘本体 (Fig. 7・12・15, PL. 9-4)

第2トレンチと第4トレンチ (Fig. 12) の断ち割り断面図から墳丘の構造と構築方法がほぼ明らかとなる。

#### 墳丘構築

基本的に墓壇をもたず、墳丘の構築は石櫛の組み立てと連動して同時的に進行していったことがわかる。そして土の積み上げは茶褐色砂質土を詰めた土嚢による土留めをしながらの版築によっている。

第2トレンチの左右の壁を図化したFig. 7やFig. 15によく表れているように、まず地山を削り出したあと、石櫛範囲に礫を敷いている。この段階で墳丘内の排水溝SD01などがさらに地山を掘りくばめて設けられたと考えられる。

そして石櫛の床石を礫の上に敷き並べたあとに、排水溝を埋めながら床石周囲全面をFig. 7の9～11層やFig. 15の1～3層の整地土を入れて床石の高さまで嵩上げしている。この段階での版築は比較的弱いけれども、確実に土嚢で抑えてある。この嵩上げの工程と外周平坦面の整地は一体で進められたものと思われる。

なお、底石上面に回りの面が達するまでに、コロレールが仕掛けられている。コロレールは心心で0.7m、それぞれ上面幅0.3mで約3.0mの長さにわたって検出した。その抜き取り跡は墓道として石櫛前面が利用される前には完全に埋め戻されている。それまでに石櫛の石材が搬入されていたのであり、奥壁、側壁などの部材がこのコロレールを利用して外から送り込まれ、順次組み合わされていったと思われる。だが、ここでひとつ問題がある。

後述するように石櫛床石と天井石には側面に相欠きがあり、その向きからするとともに手前から奥へ石材を並べていったとしか考えにくい。したがって、南から以外の搬入もあったことも考えておかななくてはならない。

さらに、天井石をいつ架け渡したのかということも、その技術的方法とも関連して問題である。扉石を除く石櫛の構築がすべて終わってから、墳丘の本格的構築が始まったのか、天井石を載せる前に、側壁の高さほど墳丘を盛っておいて、その斜面を利用して天井石を引き上げたかのどちらかであろうが、Fig. 12の①の版築がちょうど奥壁上端に一致していることは後者の可能性を支持する。とはいえ、Fig. 15にはそれは読み取れない。



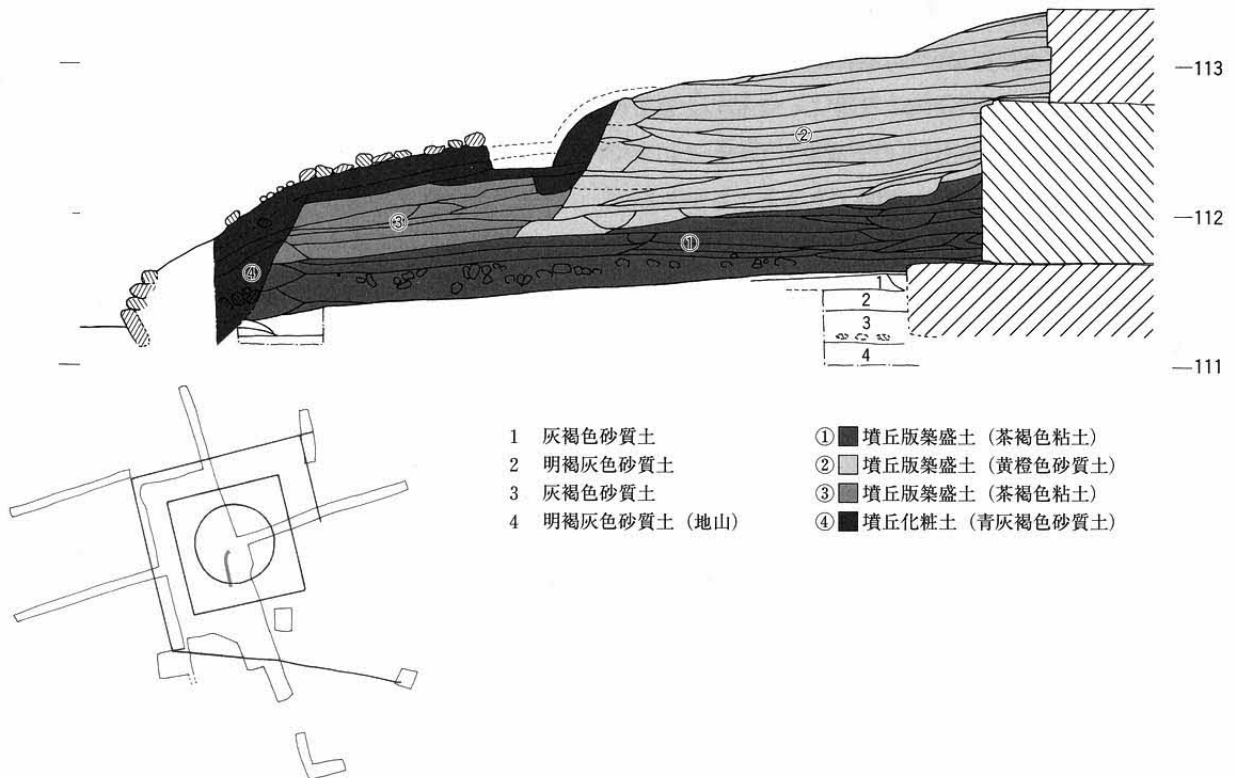


Fig. 15 石のカラト古墳 第2トレンチ断面図 1:50

墳丘の積土は、最初に小礫を入れた黄褐色青灰砂質土を厚く入れているほかは、1層あたり5cmほどの明褐色、灰色、灰褐色の粘土を丁寧に積み上げ、丁寧な版築状態を見せている。それにも大別何工程かが読み取れることを、Fig. 12を例に見ておきたい。先の①の版築のあと、石櫛を固めるように、2段築成の完成後の姿を意識して②～④の版築によって盛土していることがわかる。ただし、この段階では仕上りの外観より数十cmほど小ぶりに作られている。なお、③の石櫛天井部はとくに黄褐色砂質土の非常に堅固な版築をおこなっている。②と④は確実に端を土嚢で抑えながら版築をおこなった形跡をみせるが、③にはそれがみられない。しかし、土層断面に見えるような水平な版築層を築くにはやはり端を固定する必要があったと思われる、④を盛る時にその部分が大きく削り取られた結果、③については土嚢の単位が断面図には現れなかったと理解したい。ところで、この層が途切れる標高113.7m付近に礫が平面的に広がる部分がある。墳頂の敷石の残骸かもしれない。

このあと、土嚢積み部分を意識的に削り込み、墳丘をきれいに平滑にしてから、あらためて葺石、敷石を施しているのである。この外装を整える前に、埋葬をおこなっていることは外表施設に追加した痕跡がなく、まったく石の並びが乱れていないことから明らかである。

墳丘削り込み

本古墳で用いられている土嚢は断面は端が鋭角にとがるようにみえるものであり、外面を削り立てた角度は約65度に達する。

さて、調査時にはこの砂質の土塊が内側に対して鋸歯状に入る様子に対して、合理的な解釈ができたわけではないが、今日までに古墳時代後期以後の古墳にしばしば土嚢で端を抑えながら内部を盛っていくという例がいくつもみつかるとなってきた（江浦編1998）。したがって、

今日的視点でいえば、やはり土嚢状のもので端を抑えて版築をおこなったことは確実である。

2種の土嚢 そこには最大で0.3m以上の長さを計る塊が見られ、おそらくその倍ほどの土嚢が用いられていたと考えられる。しかし、2種の土嚢を使用していた可能性もある。すなわち、一番外を抑えるのに0.5m以上の土嚢をもちい、そのすぐ内側にあたかも詰め物のように0.4mほどの薄い土嚢も使ったように観察できるところがある。

③墓道 (Fig.7・16、PL.5・9-1~3)

墓道は第2トレンチでその西半をほとんど掘り上げており、東の壁では墓道の埋土の断面を

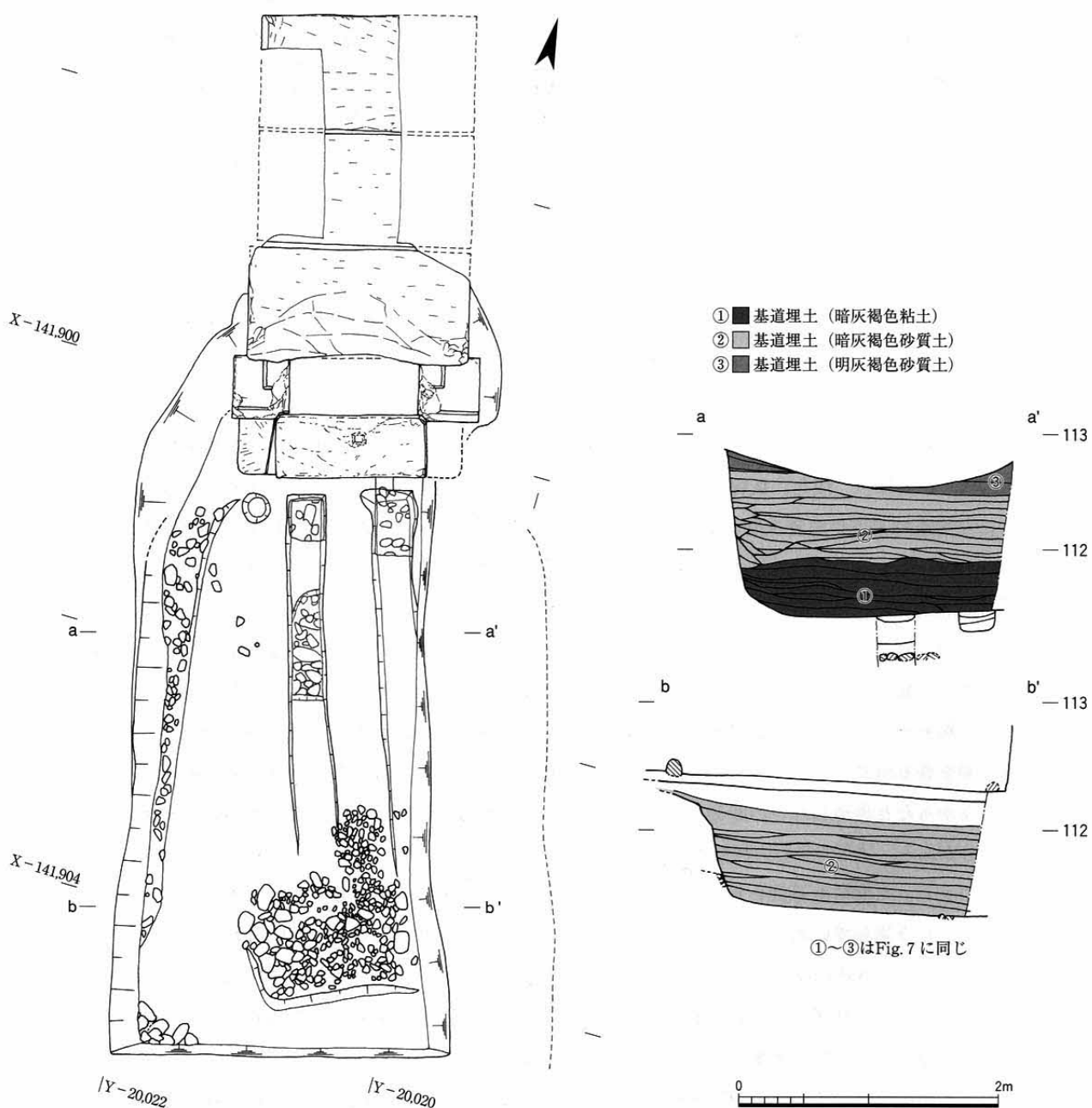


Fig. 16 石のカラト古墳 墓道および石塚 1:50

残しているが、西では墓道の西壁を直接検出している。検出範囲は長さ4.4mである。

墓道の形状は平行する東西の壁が石槨前面に急速にすばまり、石槨両側壁前端に取りつくようになっている。中軸で折り返した場合、墓道が広がったところでの幅は上面で約3.1m、底面で約2.2m、それより南ではさらに緩やかに広がっていく。墓道の傾斜は南に10%と比較的緩いものである。

墓道の形状

この墓道面上の遺構としては、西側コロレールの抜き取り跡最北端のわきに上面径20cm、深さ同じく20cmほどの柱穴が1ヶ所だけみつかった。東側の対称位置にもその存在が予測され、墓前祭に関わる遺構とみられる。そして、石槨前面から2.5m南へ離れた墓道面に東西1.2m、南北1.5mの範囲にわたって小石を凸字形ないしL字形に1層敷き詰めた遺構が検出された。

柱 穴

凸字形になろうがL字形になろうが、古墳の中軸上にあたる部分が石槨の方へ0.5mほど突出している。

これも墓前祭に関する遺構とみて間違いないが、礫敷の周囲では何ら特別な遺物はみつかっていない。その位置は下方部テラスの下、墓道出口付近にあたる。西寄りには大きめの河原石が多量に用いられ、中寄りには小さめの石が使われている。コロレールの抜き取り跡は、この範囲では、下へ続いている様子であったが、先に述べたように抜いたあとに埋め戻して墓道を整えているため、敷石検出面では明確にその抜き取り跡は見えない。

礫 敷

Fig. 7の墓道東壁のセクションから、墓道の埋め戻しは扉石閉塞後、大きく3段階の工程を経ておこなっていることが窺われる。まず、細かい単位の版築層の①が墓道外側に向かってかなりの傾斜をもって積まれる。これは粘土質で端を土嚢で抑えることはしていない。これに続いて、下方部墳丘コア部分の端とともに墓道壁際も土嚢で抑えながら版築をおこなって石槨扉石と墓道内を②の版築でほぼ埋める。最後に上円部に相当する開口部分を③で埋め戻し墳丘コアの成形を完全に終えるという工程がわかる。①と②は灰色、褐色の粘土各層の境に灰色砂が入り込む層の版築であるが、③は明灰褐色砂質土で、小バラス、粘土ブロックの混じる互層となっている。

墓 道  
埋め戻し

なお、須恵器皿 (Fig. 21-1) がこの墓道の埋土①あるいは②から採集されている。

須 恵 器 皿

#### ④石槨 (Fig. 17~19, PL. 10~12)

石槨は墳丘中央に位置し、主軸は北で西に約13度48分振れている。二上山で産出する凝灰岩製の切石による組み合わせ式石槨で、ここでは横口式石槨と称する。石槨の内法規模は東側壁で2.59m、西側壁で2.60m、幅は床面中央で1.03m、天井部で1.04m、高さは東側石、西側石それぞれ中央で1.065mである。天井部は屋根形に削り込まれていて、0.1mほど上げられている。床面は北側が高く、南に向かって緩やかに下降し、比高は2.3cmを計る。天井石外側の目地には灰白色粘土で目張りしている。

横口式石槨

石槨各部は計16石で構成されている。ただし、このうち盗掘によって最南端の天井石は失われている。床面を構成する石は4石からなる。後述する天井石同様、隣接する石と接する側面は相欠きとしているらしく、目地からそれぞれ0.23cmのところその跡が確認できる。それによると南側の床石から順次北側へ4枚敷き並べていったと考えられる。

計 16 石

床石の長辺は推定で1.7m、床石のうち短辺の長さがわかるのは、内側の2石で、南から2石目のものが0.89m、3石目のものが0.88mである。東側壁を構成する各石は南から下辺、上辺の

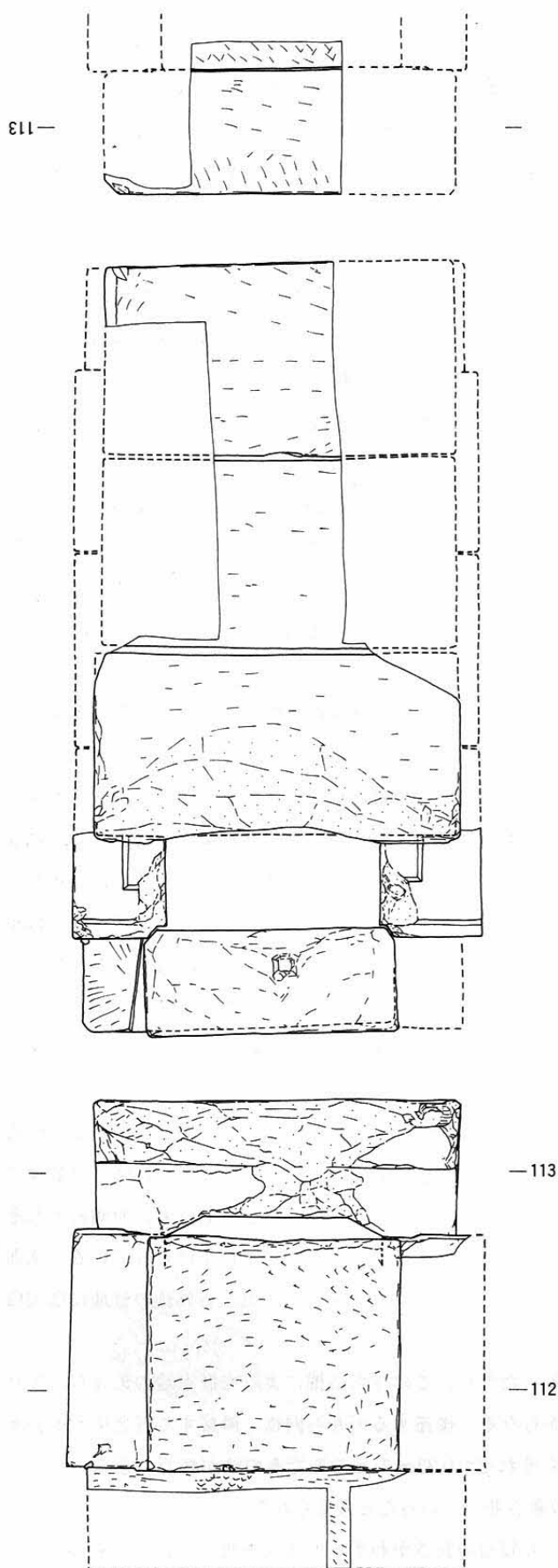


Fig. 17 石のカラト古墳 石槨外面実測図 1:30

順に記すと、長さは1石目が0.82m、0.85m、2石目が0.88m、0.88m、3石目が0.89m、0.89m、西側壁は1石目が0.86m、0.87m、2石目が0.88m、0.88m、3石目が0.86m、0.86mであり、東側石南端のみやや小さいが、0.87m平均で作られている。

最南端の床石の厚みは、扉石をはめ込むために1段下げたところで0.45mを計る。側石はそれが載る床石のへりを1段削りこみ、対する側石下端もその段に応じるように内壁側角を落とし、側石内壁と床石上面とが隙間なく組み上がるよう工夫されている。側石に相欠きがあったかどうかは明らかでないが、おそらく奥壁を設置して順に前へそろえていったと考えられる。側壁と天井石とはいわゆる逆印籠蓋の方法によって固定されるようになっている。つまり、側石の上面を20cmほど、内側が1cm低くなるようにし、そこにはまるように天井部は側面から15cmのところで段を作り出している。また、側壁南端部分は8cmの幅で約1cm落としているが、これは失われてしまった南端の天井石がそこで安定するようにしたもので、そこより南にどの程度天井石が張り出していたかは定かでない。

石槨前面では、扉石を載せやすいように床石上面を前方ほど広く1段落としている。これは側壁に対する削り込みよりもさらに深い。扉石は長辺1.3m、短辺1.06mで、底面と上面は平らであるが、両側

石に接する範囲のみ斜めに削り込んでいる。これに対応して、最南端の側壁石は内側を鉤の手  
に削ってあり、そこに扉石をはめ込むようになっている。なお、扉石と床石の間には小石をい  
くつかかせて安定を図っている。また、扉石上面に上場で10cm、下場で5cmほどの小さな方  
形の凹みがあるが用途は不明である。おそらく、盗掘後の際かその後に加えられた傷であろう。

天井石は南から2石目のもので長辺1.7m、短辺0.87m～0.92mを計る。天井石どうしは床石同  
様相欠きによって接合を強化しており、上面から0.28～0.30m付近で相欠きが確かめられる。相  
欠きの具合からやはり南から架けていったように見える。失われている南端の天井石が仮に一  
番北の天井石と同じ短辺長をもつならば、扉石をはめない状態ではほぼ南半分が側石の南端よ  
りはみ出ることになる。そのためにも南から天井石をかけ始めて、2石目の相欠きによって転  
げないように抑えたと解釈できよう。天井石どうしの組合せは北の2石間の接合があまりきれ  
いでない(PL. 11-1)。

天 井 石

天井石の幅は下面で測ると奥から順に0.87m、0.87m、0.88mで、最南端も同様の幅の天井石  
であった場合、扉石がちょうど完全におさまることになる。先に述べたように天井石内面は側  
石の接するところから屋根形に削り込み、10cm高さを上げている。狭くなった天井内面の幅は  
0.66～0.68mである。

天井石の外側目地には灰白色粘土が詰めてある。また、奥から2番目の天井石の上に薄く広  
く粘土が覆っていることが観察されるように、本来、天井全体を薄く粘土が覆っていたと見て  
よい。

それぞれの石の表面には基本的に鑿やチョウナの痕跡が残っているが、荒削りのままのところ  
と比較的丁寧に仕上げているところがある。たとえば北端の天井石の後方側面は上方約20cm  
が荒削り、下方35cmが丁寧な仕上げとなっている(PL. 12-3)。石室内部は水磨きがなされ平滑  
な面を呈しているが、部分的に壁の上部と天井部は風化してはがれているところがある。外面  
に残る鑿やチョウナ痕からは工具の刃の幅が5cmのものと6cmのものがあることが確認され  
る。奥壁裏側、扉石南側も明瞭に工具痕跡が残る仕上げとなっていて、石槨内面についてのみ  
周到な配慮がなされていることがわかる。ただし、関連する終末期古墳にみられる漆喰の塗布  
は壁面で確認できないばかりか、目地にも詰まっていなかった。また、組み合わせる場所をあ  
らかじめ示すような計画線をつけた痕跡もみつからなかった。

石 材 表 面  
の 加 工

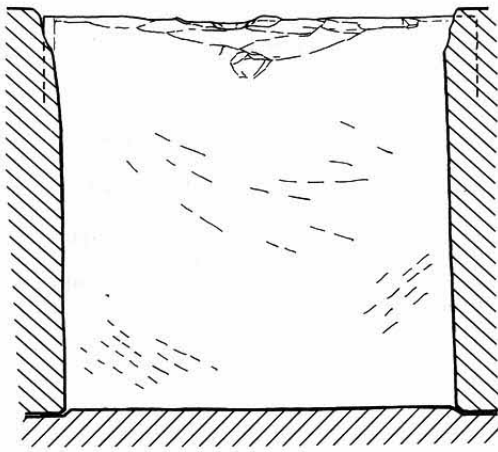
こうして組み上げられた石槨の形態は、石槨内面が天井を家形に仕上げていること、そして  
扉石で閉塞した場合、扉石左右側面が側石の前方でかなりむき出しになることなどが、大きな  
特徴で、いずれの特徴も法量は異なるがマルコ山古墳のそれと類似する。

石槨内部には大量の土砂や礫が流入していた。開口部ほど厚く堆積していたのではなく、ほ  
ぼ水平、どちらかと言えば奥壁側が厚く堆積していた。埋土は上から礫を含む腐植土、下方ほ  
ど礫を多く含む明黄褐色土と続くが、このように礫が多いのは、開口部から石を投げ込むこと  
が地元の人々の間でさかんにおこなわれたことを示しているのだろうか。その下に、北側に茶  
褐色土、南に黄褐色砂質土が端ほど高く堆積し、もっとも下層に黄褐色砂質土、灰褐色砂質土  
が薄く堆積していた。

石 槨 内  
流 入 土

奥壁寄りの茶褐色土からは、Fig. 21-4に掲げたような土師器皿が破片だがかなりの数出土  
しており、それらは主に灯明皿として使われたと見られる。近世になって盗掘にあったか、あ

第Ⅱ章 石のカラト古墳



— 112

113

112

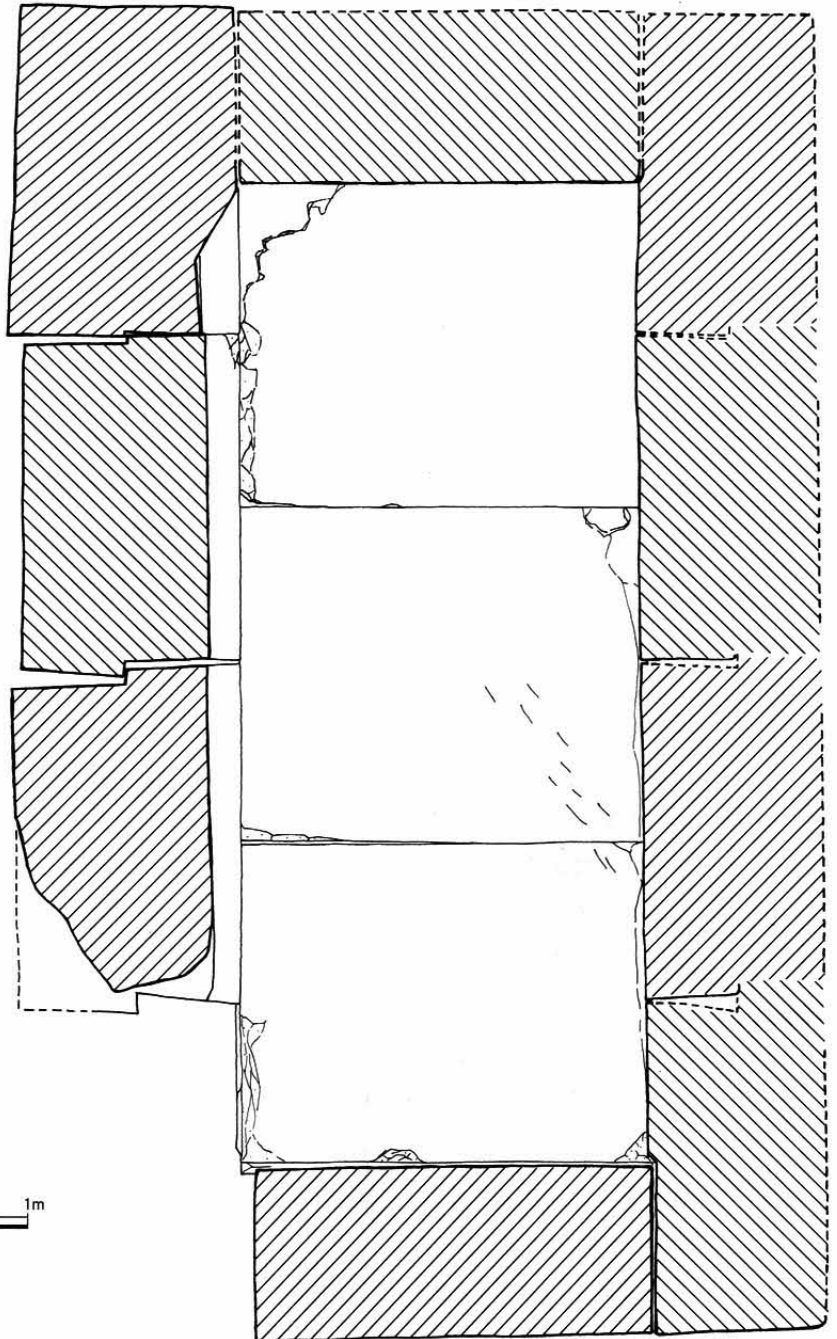
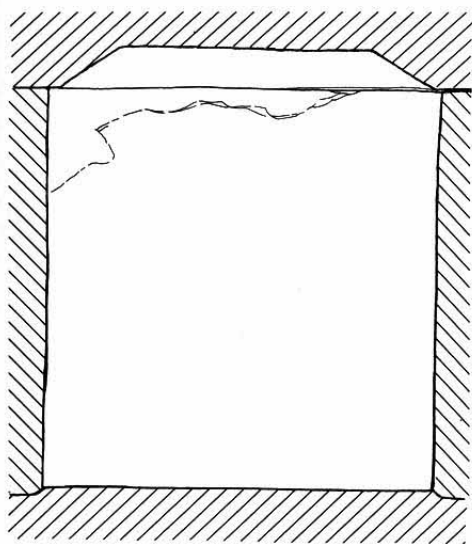


Fig. 18 石のカラト古墳 石槨内部実測図 1:20



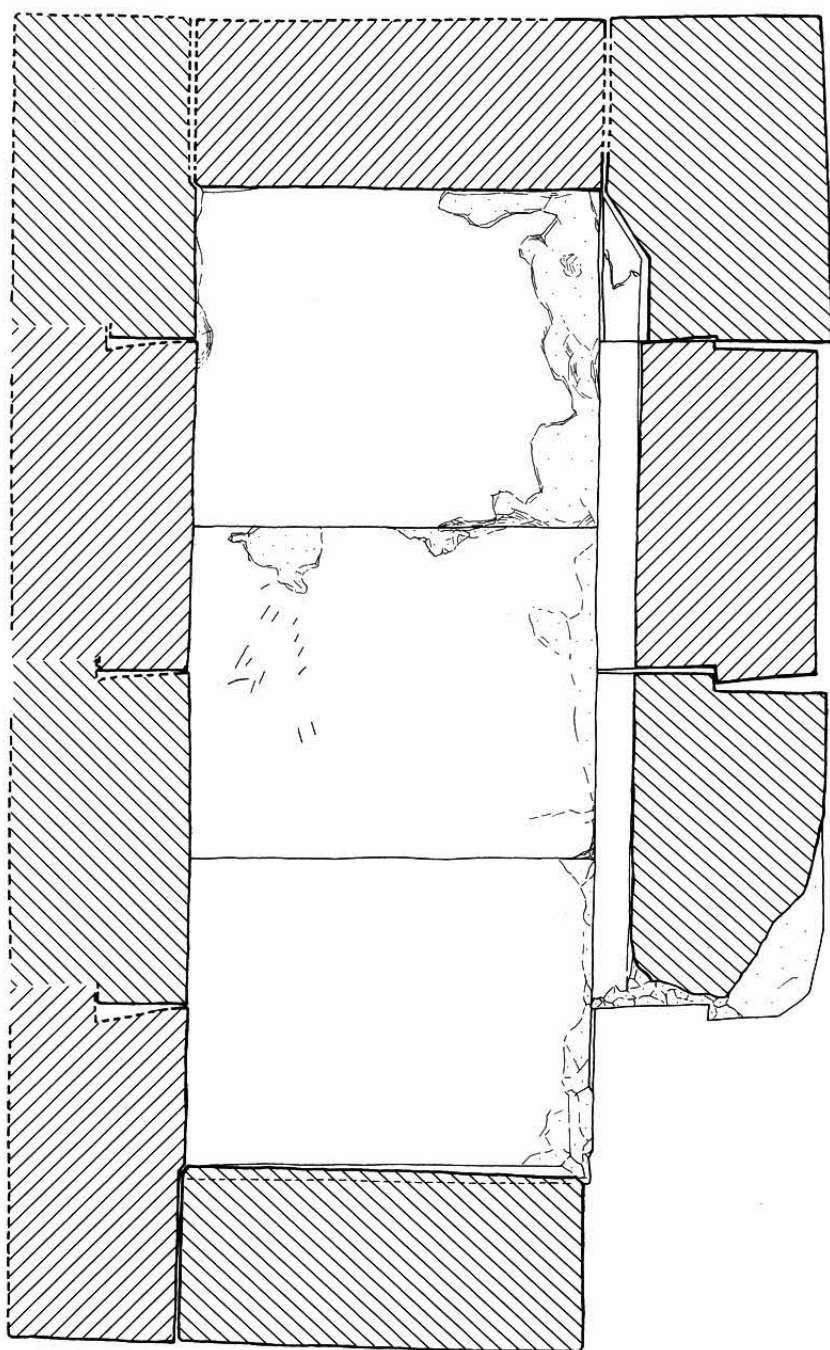
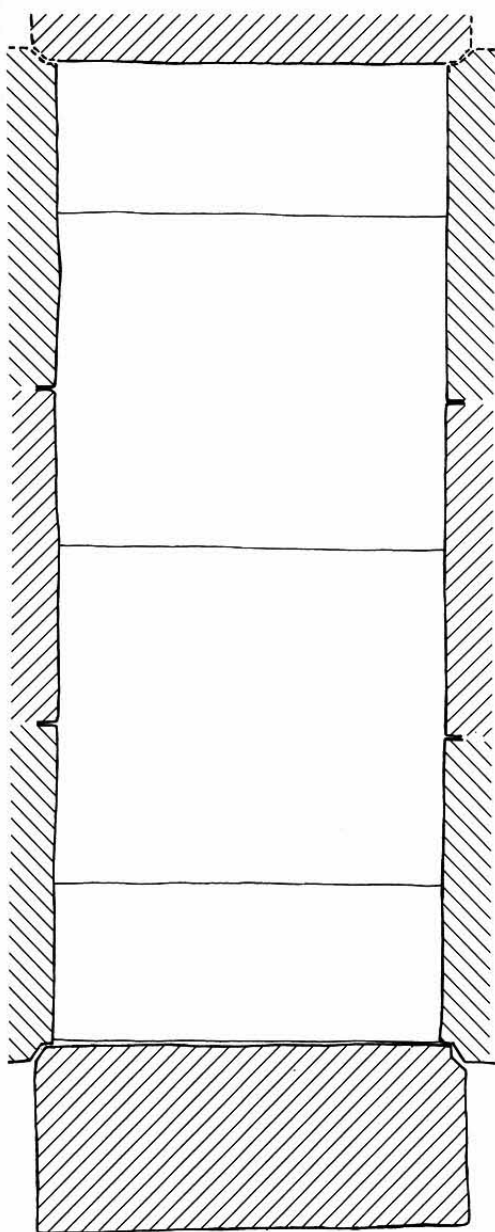
—113



—112

112—

113—





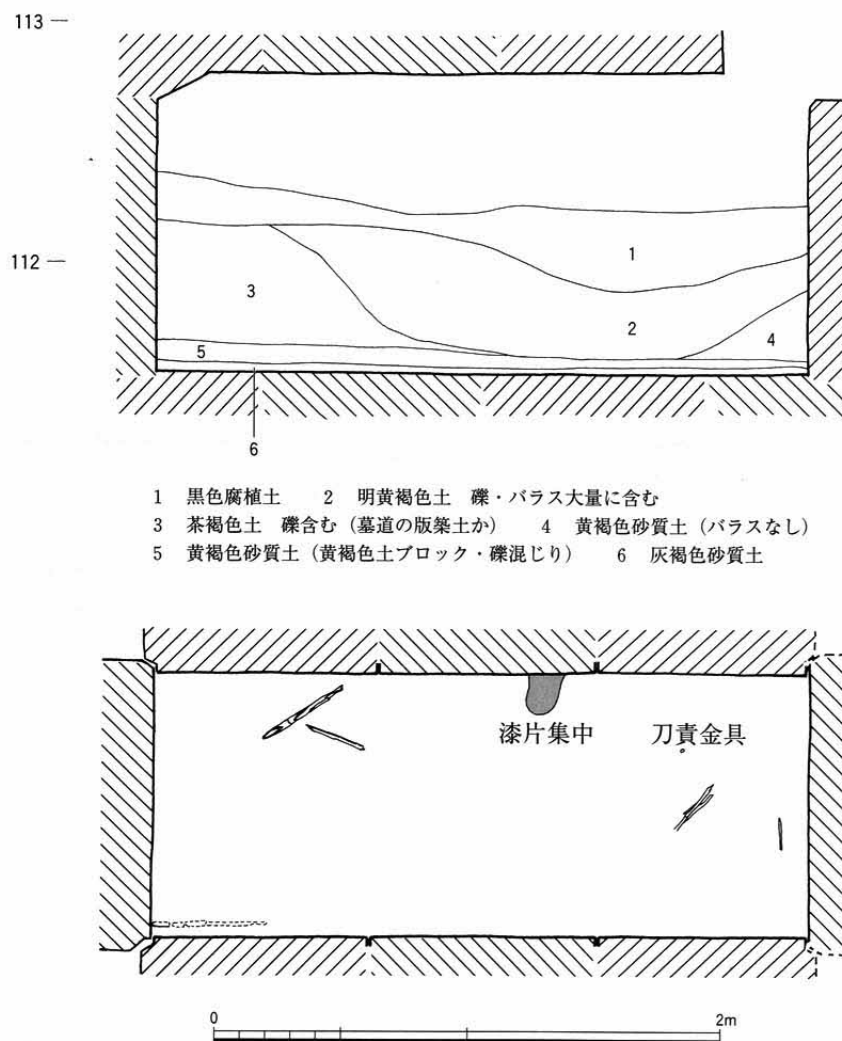


Fig. 19 石のカラト古墳 石槨内堆積土断面図・平面図 1:30

るいはすでに盗掘されていたあと、近世にそこが何らかのかたちで利用されたのだろう。

床面で検出できた本来の副葬品としては、唯一扉石から0.5mほど北に行ったところでみつけた刀の貴金具があるだけで、これもその出土状況から本来置かれた位置を大きく動かされていると思われる。このほか床面近くの砂質土中から棺の一部とみられる漆塗製品の破片が東壁付近でやや集中して出土している。それ以外の遺物は、水洗選別によって流入土の中からみつかったものである。それらの中には金箔片も含まれていた。

なお、Fig. 19平面図に見る棒状のものは竹の根などの植物の痕跡である。

## B 出土遺物 (Fig. 20・21、巻頭図版3、PL. 13)

出土品のうち、自然科学的分析は第V章で報告する。

**大刀装具** (Fig. 20-1~3) 鞘尻金具と責金具、そして柄の部材が残っている。

銀装大刀

2が鞘尻金具で銀製、おそらく蠟付け法を用いて薄い袋状に成形している。側面形は先端が丸みをもつ長方形で、端部は幅2mmの面をもち側面との間に明瞭な稜(鑊)を作っている。現状では内部に鉄刀の切っ先が詰まっていた、口には責金具が1個固着している。この責金具まで含めて長さ3.5cmあり、厚みは銀本体部分では最大1.0cmである。この責金具に接するか、わずかに隙間をあけて厚みのある革状の残存物が金具の側面に貼り付いていて、佩表や佩裏の広い側面では1.9cmの間隔をあけて直線的に途切れていることが観察される。この革状の残存物によって挟まれたところには何か別のものが貼り付けられていたと見られる。しかし、何ら接着剤などの痕跡は認められない。

むき出しになっている銀の表面は、側面では縦方向の刷痕が観察され、中央付近はやや金色を呈する。また、端面との稜付近はやすりによると見られる細かい刷痕が付いている。

責金具は2の鞘尻金具に付いているもの以外に1の単独のものがある。1は、石櫛床面で検出したものである。倒卵形で、長径3.5cm、短径1.8cm、側面からみた幅0.35cmに作られている。表面は稜をもち、対して、内面は平らで、両者の間にわずかに1mmにみえない面があり、そこにやすりがけの痕跡が明瞭に残る。

もう1点の鞘尻の約金として2に見るものは長径2.9cm、短径1.1cm、幅0.3cmで、1に比べて稜がよりはっきりしている。

3は直線的な部材だが、責金具と同じ断面形で長さ4.0cm、幅2.8mm、厚さ1.4mmの細長いものである。一端は斜めに薄くつぶして端とし、反対の一端は別材に接続すべく相欠き状にしてある。当該期の大刀装具の中で、このような直線的な部材を探すと、正倉院宝物の中に黄金莊大刀第1号(中倉8)が鞘を白鮫皮で包んで佩裏中心線で金板金を施して扼を形成しているのが参考になる。本例も扼の部材として利用されたと考えられるであろう(正倉院1977)。全面に丁寧なやすり仕上げがなされる。

これらの装具はいずれも銀製で、同一の大刀の装具であったと見られよう。古墳時代の伝統的大刀とは異なるいわゆる唐様の大刀の装具に属する。中でも東大寺に伝わる銅漆作大刀第10号(中倉8)や黒作大刀第13号(同)の類に鞘尻金具の形制は似る。1の責金具は格段のデザインをもたないので鞘口か把の責金具(約金)かのどちらかであろう。

黒作大刀と比べて本個体は、完全銀装で作られていることから、装飾性が高いということができよう。出土している金箔がこれにともなうことはまず考えがたいが、鞘尻金具両側面に貼り付けてあった別の装飾の存在を考えればやはりかなりの儀仗的性格をもっているものと言えよう。

**金製玉** (Fig. 20-4) 直径8.8mm、重さ6.37g、黄味の強い金色を呈し、光沢は鈍い。表面はところどころ黒く汚れ、細かい傷が無数に走る。完全な正球形に近いが、若干いびつで、1ヶ所に径約1mmほどの円形の窪みないし平坦面が観察される。これはおそらくその部位に別の工具が当たった跡とみられる。

玉

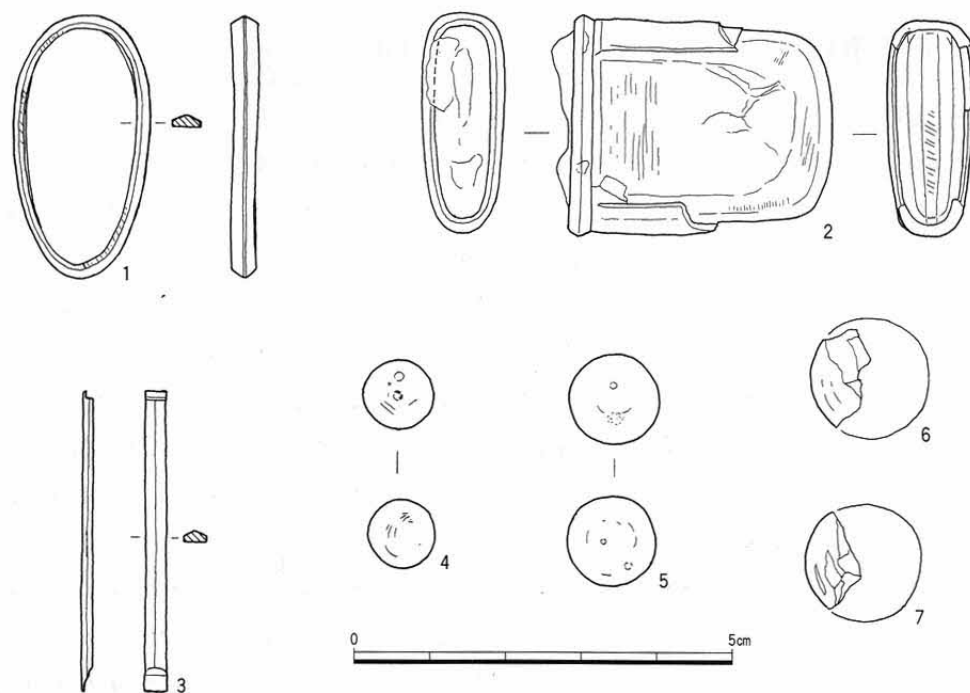


Fig. 20 石のカラト古墳 石槨内出土遺物 1:1

**銀製玉** (Fig. 20-5) 直径11.8mm、重さ9.1g、表面は錆のためか黒色化が進んでいるが、まだらに白銀色がきれいに見えるところもある。正球形ではないが、たたきながら球形に仕上げている感じがある。金製玉同様、数ヶ所に径1mmに満たない円形の窪みがある。これも工具の当たった痕跡と思われる。

**琥珀玉** (Fig. 20-6・7) 図化できるものはこの2点である。赤みを帯びた茶褐色を呈し、5片の断片となっているが、同一個体になるかどうかはわからない。1片をのぞき4点ともすべて球面を残すものの、紐孔の有無はわからない。直径1.9cmに復元できる。

**金箔** **金箔** (巻頭図版3-3) いずれもくしゃくしゃになったもので最大のものでも5×2mmである。石槨内堆積土を水洗して採取したものであり、石槨内での分布の粗密はわからない。他の材質のものに付いていた痕跡や、顔料などの付着は今では観察できない。

**漆片** **漆片** (PL. 13-3) いずれも細かな破片で最大のものでも1辺1cmに満たない。石槨内の東壁に比較的集中してみつかった。非常に薄い何かから剥がれたような状態で、内面に布目痕を残すものと木地のようなものを残すものがある。また、片面に水銀朱が付着する残片もわずかではあるが存在する。こうした状況から、厚く漆で布を重ね合わせた夾紵棺というよりも本体は木か何かで、その表面に布を張ってその上から漆を塗り重ねたような棺の存在が推定され、その表面の漆膜が残ったものと考えられる。朱のついた断片があることから、ことさら棺以外の製品にともなう可能性を追究する必要はないであろう。もちろん朱のついた面は棺内面ということになる。

**須恵器** **土器** (Fig. 21) 1が墓道埋土に入っていた須恵器皿Cである。口径10.5cm、高さ2.5cmを計る小型の皿である。口縁端部を外側に引き出す。底部外面はヘラ切り後ナデ調整で整える。

2と3が第2トレンチの墳丘南裾外側の堆積土から出土した。2が須恵器杯Bの蓋で復元口

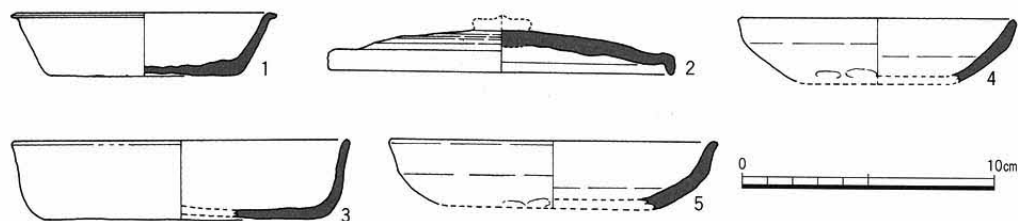


Fig. 21 石のカラト古墳 出土土器 1:3

径16.6cm、つまみは残っていない。3は須恵器杯Aで残りは悪い。復元口径13.5cm、高さ3.1cmである。底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。

古墳に関係する可能性のあるものとしてはこれ以外に、土師器細片があるが形はわからない。

4が石槨内の茶褐色土から出土した土師器皿の中で、比較的形のわかるものである。復元口径10.8cm、胎土は白褐色で焼成は良好。近世前半、17世紀頃のもので、灯明皿として利用されたものであろう。比較的まとまって出土しているので、石槨の盗掘時ではなく何らかの目的ですでに開いていた空間を利用した時期を示すものであろう。

5が第2トレンチの暗茶褐色粘質土から出土した土師器皿で、復元口径13.0cmを計る。口縁部付近を幅広くヨコナデするもので、底部外面にはユビオサエの痕が残る。茶褐色で焼成は普通。11世紀頃のものと思われ、この時期に最初の盗掘がおこなわれた可能性を示唆する。

1は年代を限定することの難しい須恵器皿である。いっぽう2と3は奈良時代前半に下るものだが、墳丘外での出土であり古墳築造時期を示すものではない。

#### 参考文献

- 飛鳥資料館1979『飛鳥時代の古墳』飛鳥資料館図録第6冊  
 梅原末治1925「相楽村ノ方形墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』6  
 江浦洋編1998『蔵塚古墳』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第24集  
 大阪府立近つ飛鳥博物館2003『壁画古墳の流れ』大阪府立近つ飛鳥博物館図録31  
 金子裕之2004「都城における山陵－藤原・平城京と喪葬制－」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集  
 上林史郎2003「後・終末期古墳における墳丘内暗渠」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』関西大学考古学研究室  
 京都府教育委員会1979『奈良山－Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』  
 正倉院事務所編1977『正倉院の大刀外装』  
 高橋克壽2002「古墳の葺石」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所創立50周年記念論文集  
 塚原二郎2004「東京都武蔵府中熊野神社古墳の調査」『考古学研究』51-2  
 坪井清足1948「生駒山脈に於ける古墳の地理的分布」『生駒山脈－その地理と歴史を語る－』積善館  
 長江正一1920「京都府相楽郡相楽村の方形墳」考古学雑誌11-1  
 沼津市教育委員会1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書その2』  
 石島和夫・土生田純之・曹永鉉・吉井秀夫2003『古墳構築の復元的研究』雄山閣